



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₇₀ 1 2 3 4 5

始



18108
39



名
流

情

話



大正
6. 5. 8
內交

名流情話

目次

西郷南洲と愛妻あい子……………(1)

子供を連れて直ぐに來い
天打つ高浪を越えて徳之島へ

桐野利秋とお秋さん……………(10)

手に手を取て池の端をブラ〜
籠の短刀を抱いて別れを惜む圖

中島歌子と林忠左衛門……………(17)

獄舎へ響くは銃砲の音

目次

字足らずの和歌も真情の發露

前原一誠と綾子、お秀……………(21)

墓の名にまで三人名前

あてられたは後の世の吾々

夜嵐お絹と權十郎……………(32)

此期に及んで未練は言はぬ

たい私ゆゑ親方さんへ

勝安房と金瓶大黒の遊女……………(56)

涙を呑むて女郎を口説けば

釣臺の文箱は艶書の山

富貴樓のお倉と龜次郎……………(63)

親は仕事師育ちは淺草
二人揃つて京都へ駈落

井上馨とおきみさん……………(72)

附り中井櫻洲の妻

かたみとなつた鏡ぶくろ

大隈へ入れた一札

陸奥宗光と瀬川……………(83)

兄は江戸へ弟は京都へ

葉櫻に寫る「瀬川」の灯

オールズと喜遊……………(99)

嘘と云ひ誠といふも

山縣有朋とお壽美さん……………(110)

謀られたりな伊藤俊介
却説友子夫人の貞節

新喜樂のお金と權之助……………(116)

胴拔の上へ幫間の羽織
つゝまる處は茶の宗匠

伊藤博文と三芳太夫……………(124)

見付けられたは百年目
身受せうにも金がない

伊東巳代治とおみよさん……………(134)

板垣退助と女乞食……………(140)

お前もみよなら俺もみよだね
藤公を口説いたも此の手

星亨とお雛様……………(149)

くれてやつたは姉さんの晴衣
悪戯小僧は棧敷の殿様

千歳米坡と光明寺三郎……………(159)

附り後藤猛太郎
父は俠客娘は藝者

其終がマヅイ

山本權兵衛とおときさん

(167)

まだ肩揚も取らぬ處女
猛然として出掛けたは箸屋

加藤高明と養家の養女

(178)

からかはれてアソク怒り
うつけにしたも功名心から

尾崎行雄とテオドラ嬢

(191)

退去命令を受けて神色自若
郵便脚夫がキニヒツトの役

相馬子爵と夫人

(197)

悲惨なりしは其の一生
鐵窓にも見ゆる夫人の佛

中村雁治郎と梅菊

(215)

附り佐野の大盡

一年経つたら暇貰ひまひよ
今日と云ふ日を忘れるな

犬養毅とお千代さん

(228)

寢言にまでお千代く
驚いたは大隈巨口侯

光村利藻と豆千代

(236)

寢衣の袂にも紙幣の反古

聞ゆるは警鐘亂打の響

高橋義雄と吳服屋の娘

(254)

暖簾を分けて島田に振袖

いとはんの御蔭てお拂箱

長井長義と獨逸の乙女

(261)

ホテルの食堂で見初めた少女

華やかなりし異人種の結婚式

佐野醫師と雛妓染子

(278)

可恐は色魔の毒牙

菩提の花を散し畢んぬ

大隈重信と

(288)

氣取つたりな紫の打紐
是では持てぬも道理々々

ほんたと清兵衛

(294)

彼女の情話は餘に有名である

涙の出る程嬉しい言葉

田中光顯とおかり

(300)

呪はれたは二人の戀よ

散つた後の花はさんぐ

加藤お雪とチヨージモルガン

(309)

會話を習ふも夫のため

死目にも會へぬ最後

頭山満と寒菊の女將……………

(319)

附り市村羽左衛門

大太刀を持つてコラッ！

縮み上つたはズボラの羽左

白井庄三郎と桃太郎……………

(333)

出来る事なら朝鮮までも

右手には銀色に輝く拳銃

小室翠雲と小蕙女史……………

(341)

家庭を離れてメキ／＼上達

さりながら戀しきは妻よ夫よ

名流情話

西郷南洲と愛妻あい子

子供を連れて直ぐに來い
天打つ高浪を越えて徳の島へ

文久二年の夏六月、南洲は島津久光公の激怒に觸れて、徳の島へ渡つて行つた。けれども、寺田屋騒動に關しては、自分では何の罪もないものだと思つて居た。ただ殿様の御側の衆に憎まれたので、久光公が腹を立てたのであると思つて居た。

西郷南洲と愛妻あい子

又、藩廳が彼を取扱ふ鹽梅も、初めは寛かな所もあつた。第一帯刀をも許すし、罪人扱にもしなかつた。だから南洲は徳の島へ渡つてからも、岡前村といふ處へ居宅を構へて、謹慎の意を表して居たくらゐである。

けれども、徳の島へ渡つて了つては、もう策の施しやうがない。

南洲は考慮が深いほど、又意志が強いほど、それだけ更にく世の中が味氣なく思へた。

ア、馬鹿々々しい。もう忘れても世の中などへ出るものぢやない。と思つた。徳島でも我住家と思へば、花も咲けば、鳥も鳴く……

だから徳の島へ渡つてからは、兼て大島の故郷に残してあつた、妻の愛子の處へ手紙を遣つて、

「今度都合に依つて徳の島へ住居するやうになつたから、便船を待つて子供を伴れ、

そして来い。」

と言つてやつた。愛子は此の手紙を読んで、飛立つほどに喜んだ。そして、二人の子供を連れて、同年の八月二十六日、然かも焼くが如き炎天だと云ふのに、天打つ高浪を越えて、徳の島へ渡つて来た。

南洲は愛子と子供が、意外に早く来たのを喜んだ。誰でも親子の情愛は暖いものである。南洲は大きな膝の上へ、二人の子供を乗せて、頭を撫てたり、背を擦つたりした。愛子も側から別れてからの話をして、互の無事を喜んだ。

實に南洲の一生を見れば、烈々たる災天に、泡立つ高波を漕ぐやうな、熱い、危険な事ばかりでも、時には憚う云ふ柔かな、涼しい風でも吹いて居るやうな、穩な、長閑な時もある。

一家、誰れ一人他人が居るではなし、親子四人で、美しい、清い、海島の空氣を

西郷南洲と愛妾あい子

今吸つて居るのだ。

それを妨げるとは何と云ふ無情であらう。此の楽しい語ひは、まだ思の十が一にも及ばないのに、唐突に垣根の外で、

「西郷どん〜！」

と呼ぶ聲がした。南洲は子供を膝の上から降して、立上つて見た。と、庭にはハヤ在番役の中原萬兵衛が立つて居た。

二

南洲だつて、獅子や虎ぢや有るまいし、さりとて酷い薩藩の處置ではある。

南洲が浪士を煽動てもしないものを、煽動てたと疑つて、お上の大策を妨げたと、薩藩では難癖を付けたのである。

而して、日本の本土に居る内は、彼には牙のやうな青年が大勢附いて居るので、

それが藩では怖いものであるから、まあ何の事はなく、徳の島へ渡して置けば、孤島ではもう青年の手も届かないから、云は、南洲は牙の折れた獅子同然の身である。

それだから何の心配もないやうなものなのに、今又突然、左の嚴令が下つて來た。

「召捕り、沖の永良部島へ遠島申付候に付、着島の上は、圍へ召込め、晝夜開かざる様、番人二名を附け置くべき事。」

宛て獅子か虎を處置するやうだ。それが、七月薩藩を發して、此の徳の島の在番役の許に達したのが、丁度愛子が子供を伴れて來た、八月の十六日であつた。

島の在番役員等は驚いた。平素南洲を敬愛し、且つ畏怖してるものも多いのに、此の無情冷酷な達書が來たので、皆集つて會議をした。

中には心配する者も出來て來た。

西郷南洲と愛妾あい子

「これを西郷どんに示したら何うぢやらう、もしや月照どんの時のやうに、自殺どもされてはもう破滅ぢわんすが……。」

て、汝行け、君行け、と果しがない。因て中原が、

「そいは言る通りに相違ぢわんど、お上の嚴命ぢやて猶豫なりもはん。我身は輕いもんぢやが、お差支へがなかなら、此の大任に當り申す。」と買つて出た。

而して、命令書を懐にして、南洲の處へ行つた。

けれども、中原は、南洲の住居の窓の下まで行くと、家の中では遙々愛子が子供をさへ連れて尋ねて来て、親子楽しく話したり、夫婦睦まじく物語つたり、して居る最中なので、遠慮をした。

而して、君命とは云ひながら、此の無情な命令書を示すに堪へないと思つて、思はず懐の命令書に、手を置いて貰ひ泣をした。

どうも強ひて家の中へは入られない。思はず足は後戻りをして、數町も戻つて来た。が、又、熟く考直して見ると、公事は少しの間も寛かせには出来ない。再び南洲の住居の前へ来た。そして唐突に大聲を發して呼び、其勢ひて庭へ廻つた。

南洲は其時聲に應じて出て来たのである。

中原は縁に腰を掛けて、成るだけ愛子の方を見ないやうにして、

「お前様、もう此島に居らるゝ事出来ねえことに成い申した。誠にお名残惜いこつてぢわんさ。」と言つた。

南洲は別に顔色も變へないで、

「はあ、然うてぢわんすか。飛脚船が來たちふ事聞申したて、腹切れちふ事ごあんそ。」

中原は直ぐ命令書を差出した。傍には愛子が子供を慰して居る。

南洲は命令書を受取つて、謹慎な態度で黙拜し、それから披いて見た。中には沖の永良部島へ遠島の事が書いてある。南洲は再讀した後莞爾して、

「命だけは、お助け下さる容子ごめんすな、誠に有りがていこつてごめんす。」

當時の藩情では、此時のやうに主君に怒られれば、大體は首を刎ねられるのであつた。それが遠島なので、喜んだのであらう。

南洲は、命令書を押戴いて、傍らの愛子を見て、

「汝も遙々海を越えて來やつたが、今聞いてるごと、俺は今度沖の永良部島へ行つて、牢に入る事になつたて、汝を伴ひことならんて、子供を龍郷に戻して育てられる。萬一達者であれば、又遇ふこと有ッから……」

愛子は、これを聞いて其場へ泣伏して了つた。

子供は、何も知らないから、唯きよろくと父母の顔を打目成つて居る。

中原も此の有様を見て、涙を零した。

愛子と子供は、泊る事僅かに二日であつた。別れてからの委しい話もまだ濟まなかつたであらう。其月の廿八日に、愛子は二人の子供を連れて、すどくと波打際を歸つて行つた。

其日の浪は高かつた……

桐野利秋とお秋さん

手に手を取つて池の端をブラ／＼
筐の短刀を抱いて別れを惜む圖

明治十年の九月二十四日、西郷の屍骸を擁して、城山で自刃をした、桐野利秋と云へば、慄悍な、可恐しい猛將のやうに聞えるが、見た處、實に意外だつた。彼が、東京で池の端に住んで居た頃、夏の晩など、最極上の薩摩上布に、白縮緬の兒兵帯をだらりと結んで、ギャン切頭髪を綺麗に分けて、香水をプ／＼／＼香はせ純金の指輪を嵌めた右手に、塗柄の團扇を携へながら、ブラ／＼上野邊まで散歩して居た處からなど考へると、とても數萬の貔貅を叱咤した猛將とは思へなかつた。

一體、猛將とはあゝしたものか知らん。同じ明治の十年に、露西亞と土耳其と戦端を開いた時、單騎でダニユーブの大河を横斷したり、又、オスマンパシヤのプレブナの岩を破つたりして、驍勇の名を歐羅巴の天地に轟かした、露國のスコベルフ將軍杯も、矢張り身の廻りに注意をした男で、軍中では敵の目標になる様に、いつも白リンネルの軍服を着けて居た。と云つた人がある。

閑話休題、その桐野が、今の湯島切通し坂にある岩崎の邸（もとは旗本の邸であつたのを、桐野が買取つて自分の住居にして居たのである）に、居た頃の事を考へて見ると面白い。

當時の桐野は陸軍少將從五位と云ふ肩書を持つて居たばかりでなく、その勢ひは素晴らしいもので、陸軍部内では、何事も、此人に依つて定まると云ふ程の、豪い勢力を有つて居たのである。

従つて、邸へ出入の者も非常に多く、女手も自然必要だつたので、妾を抱へて酒食の世話をさせて居た。中に一人お秋と云ふ美人が居た。

一跡、桐野は、妾運の悪い男で、何う云ふものか長く居附かない。中にも二日か三日で逃げて了ふのがある。長く居て一週間か半月、それも旋てはお暇を願ひ出る。よく／＼様子を聞いて見ると、それも餘儀ない事情があるのだ。

と云つて、桐野が、猛將だから、それが可恐しい譯ではない。又お手當が悪い譯ではない。

何しろ今も云ふ通り、イザ戦場に臨むとなれば、三軍を叱咤するやうな勇氣のある猛將だが、國事の餘暇があれば然うやつて、ブラ／＼池の端を散歩しやうと云ふやうな男。無論氣も利いて居る。お手當も好い。身分が身分なり誰しも望む處だ。處が此處に一つ不思議な事がある。是は人を斬つた事のある者には、誰しも經驗

のある事だか、分けて桐野は境遇が境遇、時代が時代であつたから、殊に斬つた數も多かつた。文久から慶應へかけて、まだ彼が中村半次郎と云つた時代である。

それが、今世も治まり、明治もはや十年となつたので、幾らか氣に隙が出来たものか。曾つ又如何に猛將なりとは云へ、人生の常として、過去を顧みるの情が生じたものか。時々桐野は、夜悪夢に魔れる事がある。

傍に居た妾が、

「もし、あなた……」

と云つて揺り起すと、桐野は目を覺して、「何うかしたか？」と聞く。

「今大層お魔され遊ばしたやうに存じますが、」と云ふと、

「うむ、然うか、は／＼／＼。實はな、乃公が昔斬つた奴が、今やつて來居つた處ぢや、」

「……、まあ、幽霊が出たのでございますか、」

「何サ、幽霊と云ふ程の者でもないが、乃公が昔京都で斬つた奴が二人、髪を振亂して、血だらけになつてな、乃公の枕元へ坐つて何か言はうとした處を起されのぢやよ。夢ぢやよ、些とも怖がる事はない。」

と云つたが是が怖がらずに居られうか。氣の弱い女達は、それを聞くと皆御免を蒙つて、翌日は出て行つて了ふ。幾人もく、恚う云ふ譯で居附かなかつたのだ。處が最後に來たお秋だけは、健氣で、又忠實であつた。そしてそんな事には驚かなかつた。

否、驚かなかつた許りではない。

「だつて、貴方は何も私の爲に御殺しになつたんぢやないはとございますんか。それなのに、ま随分不都合な幽霊で御座いますわね、折角御前様のお寢みの邪魔なん

ぞして。そして幽霊は何と申しました？」など、その後を聞かうとする始末。

「處が、お前が起したもんだからその後は分らなかつた、」

「まあ御笑談ばかり、」

と恚う言つた始末。是には桐野も少からず感心した。そして如何にも睦しく暮して居た。毎日、陸軍省から歸つて來ると、よく兩々相携へて、池の端など散歩してゐるのを見た。けれども彼は其の間にも、如何なる事を胸中に畫策して居たか解らない。

お秋も亦どんなに彼の將來を氣遣つて居たか知れない。

其内に、桐野も、西郷大將の辭職と共に、身を退いて薩摩へ歸つて行つた。歸る時にお秋へは、よく世話になつたと云つて、兼て彼が秘藏をして居た、菊一文字の短刀と、食ふに差支のないだけの金子とを與へて暇を出した。

お秋も俱にと願つたけれど、それは桐野が許さなかつた。
 彼はもう、其時分から、城山の死を豫期して居たかも知れぬ。
 桐野が、陸軍少將の、金モールのついた大禮服を着て、威風堂々と白馬に跨つて居ると、其下に被布を着た切下髪の意氣な女が、錦の囊へ入つた短刀を抱いて、別を惜ひて居る背後を紅で塗つた錦繪が、明治十年の戦争後に、飛ぶが如く賣れたものだ。今も何處かに残つて居る筈だ。あれが桐野の愛妾お秋である。との事である。

中島歌子と林忠左衛門

獄舎へ響くは銃砲の音
 字足らずの和歌も真情の發露

中島歌子は民間女流の歌人、手跡も美事に、品行も正しかつたので、大内よりも屢々和歌を召された事があつたが、「隱士山出」の勅題に

山清水、汲む人絶えしあとにこそ
 濁なき世の影は見えけれ

と奉つたは、殊に秀透の譽高かつたと云ふ。けれども何も女史だからとて、初から歌が上手であつた譯ではない。唯だ其の道に熱心であつたのと、詩想の起つた紀

中島歌子と林忠左衛門

元の格段であつたのが、此歌人を成功させた所以らしい。其處に悲痛な人生がある。又優しい情話がある。

抑も歌子は江戸日本橋北鞆町の産で、江戸ッ子であつたが、幼名をとると云ひ、花の盛りの十八の齡に、林忠左衛門の妻となつた。

が、忠左衛門は水戸の藩士で、兼てよりも王事に奔走して居た處から、彼の正奸兩黨の軋轢の時には、歌子も奸黨の手に捕へられて、澁田の獄舎に繋がれて居た。

試みに花羞かしきまだ妙齡の美人の歌子が、嚴つい鐵窓の下に端座して居る圖を想像して見よ。其處に國事の象徴がある。亦悲劇がある。美がある。

然かも彼女はまだ新婚當時であつた。島田に結つた花嫁子であつた。青春の血の漲る時であつた。生木を引裂かれた時の心地は甚麼であつたらう？

けれども彼女は武士の妻と云ふ、つゝしみを持つて居た。又妙齡の羞耻を持つて

居た。

折しも冬の半ばで、火の氣もない、寂しい冷たい鐵窓の下に端座して、遙かに、若い、血氣に逸る、良人の身の上を案じて居ると、突然此の寂寥を破つて、パチ／＼と云ふ物の音がした、

歌子は其時ハツと思つた。

耳を澄して聞くと、正にそれは、鐵砲の音に相違ない。而して、何うも、その見當が、筑波山の麓あたりに相違ない。

借は、彌よ、我が夫も、あの中に加はつて、勇ましく戦つて居られるのか。丸の霰 煙の雲に、血を漲らしても正義を立てられる、健氣なお心は然る事ながら、あゝ、今頃は甚麼であらう？

お怪我はないか。

正義の勝利を得給ひしか。

と、獄舎の苦痛も忘れ果て、凍むやうな冷たさをも覺えず、夜一夜思ひ明した眞情を思はず、

遙なる銃の音聞きて俄に

獄舎の寒さ忘れける哉

と口走つた。而して懷紙の端へそれを紅筆で書付けたが、素より歌も何もまだ知つて居たのではなかつた。それ故破格は勿論の事だが、詩想は自らその中に備はつて、尋常の死歌とは同日に論ずべきものではなかつた。

事平いて後、歌子は奸黨から免されて獄舎を出たが、不幸にして忠左衛門は、下野國部田野原に於て戦死をして了つた。其後、歌子は身を國文歌道に委ね、人も知る如き女流の大家となつたが、明治の初年、歌道衰退に方り、其挽回に盡處も亦多かつた。

前原一誠と綾子、お秀

墓の名にまて三人名前
中られたは後の世の吾々

編者曰、前原一誠は長州の人、通稱彦太郎、字は子明、黙字梅窓太虐洞の號あり。戊辰の役に藩命を奉じて、越後口に軍功あり。明治二年兵部大輔兼參議となつたが、三年諸參議と合はずして官を辭し、故山に歸り、九年十月廿八日、新政を悪んで君側の奸を除くを以て名とし、遂に兵を擧げ、熊本の神風連、及び東京永岡久茂と謀を通じ、横山俊彦、奥平謙輔等黨數百人を率ゐて萩の縣廳を襲はんとし、官軍來ると聞いて海路山陰に赴き、翌月五日出雲爪生港に捕へられ、

前原一誠と綾子、お秀

十二月三日遂に長州に於て斬せられた人である。年は四十二。昨春從四位に叙せられた。

—

一誠の妻は綾子と云つた。又妾をお秀と云つた。綾子は然ら美人ではなかつたが、伶俐な女であつた。

一誠は綾子をよく愛した。又綾子も一誠をよく愛した。けれども、何う云ふものだつたか、夫婦の間には子がなかつた。

それで、其頃の道徳で、妻に子が無い時は、妾を置くと云ふ事が、習慣的に許されて居た事なので、綾子も承諾の上で妾を置いた。

處が妻妾の間が頗る睦じい。宛て姉妹のやうだと云ふ事があるが、それにも増し

て間が好い。一人が髪を結つて遣れば、又一人が結つて遣る。一人が白粉をつけてやれば、又一人がつけてやる……

と云ふもので、何うかすると肝心の一誠をさへ其方退けと云ふ態……

一誠は見て脂下つて居た。時には、

「何うだい乃公の家庭を見る、」

など、同寮を中てる事もあつた。中てられて同寮は、

「彼奴め、宛て兩手に花ぢやが、」

など、役所でも専ら此の噂であつた。

處が、是は、一誠の、操縦術が巧かつたばかりではなかつた。實は細君も偉かつたのである。

二

お秀は綾子から見ると齡も若ければ容貌も美しかつた。餘り立派な身分の者の娘ではなかつたが、性質も可なり賢い方であつた。

綾子は先づお秀の人物試験をやつて、お秀を及第させたのである。だからお秀に不足があつても、不足を云ふ事は出来ない羽目になつて居た。是が一つ。

亦、有繋に綾子とても、良人に對する意地もあり、世間に對する見得もありて、有繋に綾子の目は高いと、人にも言はれるやうに努めたので、何一つ不足を言つた事もなし、又實際妹のやうに可愛がつて居た。

三

子供を擧げる爲に妾としたお秀には、矢張り是れにも子がなかつた。然し子供のないと云ふ事が、一層綾子の同情を惹いて、二人は猶睦じかつた。

一誠は綾子を愛すると同じやうに、又お秀をもよく愛した。何方かと云ふと年が若くて美しいお秀の方が、餘計に可愛かつたに相違あるまいが、綾子がお秀を自分の妹の如く撈るのを見ると、綾子の心盡しを感謝せずには居られなかつた。

一誠は綾子を敬愛し、又お秀を鍾愛した。

だから綾子の事を呼ぶのに「綾子」と云つて、呼捨にはしなかつた。いつも「奥・奥」と呼んで居た。又、お秀の事を「秀……秀……」と呼捨にして居た。

手紙を書く時にも綾子に對しては「お綾様」と書き、お秀に對しては「秀どの」と書いて居た。決して妻妾の禮を亂さなかつた。

四

一誠は明治九年の十一月、官軍に抗して捕へられ、遂に獄に下された。獄中から屢々書を寄せて、二人の安否を氣遣つた。「いつくまで二人は間好く暮すやう」とは、其都度書いて来る言葉であつた。中には涙のにじみ出るやうな優しい言の葉も交へてあつた。

愈々斬罪に處せられる事が極つた時、一誠は自分の墓を恚う書いてくれと云つて、二人の處へ手紙を出した。

明治九年何月何日歿行年三十九年六ヶ月

前 原 一 誠 墓

配 楊 井 氏
妻 秀

揚井氏と云ふのは蓋し綾子の里の姓である。綾子を尊んで態と姓を以てしたものの。妻の名まで墓碑に並べて刻ませるとは、蓋しよくく可愛かつたからに相違な

50

五

愈々一誠が刑に臨む前の日である。

時の縣令關口降吉は訣別の爲に獄舎へ行つた。

と、一誠は大いに喜び、關口と共に藁蓆に坐つて、關口の持つて来てくれた酒を大いに飲んだ。

酒の肴は是も關口が持つて来てくれた鶏卵であつた。

前原一誠と綾子、お秀

一誠は笑つて云ふには「イヤ久しぶりでの御馳走で、腹の蟲がギウ〜云ふわい。恚うして貴公と一緒に飲むうまさ」と云つたら又とない。藪幕の上には坐つて居ても柳橋や今春の美妓を擁して高樓に杯を傾けるに優る幾何ぞやだ。明日死んでも貴公の恩は忘れんぞ。」

關口はそれを聞くと涙を流して、

「イヤ、君と明日別れるのかと思ふと僕は辛い、君と別れる事には忍びない。」と云つた。

すると一誠は「ぢやア一緒に死んでくれ。別れるのが辛きやアそれより外に道はない。」

關口も關口だから首を振つた。

「イヤ、俺は貴様と一緒に死ぬ事だけはお断りだ。」

「ぢやア別れが辛いなど泣き言を云ふなよ。アツハツハツハ、」
一誠は大口を開いて笑つた。

六

然しそれ程剛膽な一誠も、妻と妾の事を思ふと、戀しくてならなかつたのであらう。他にも猶ほ二人に宛て、懇々と情を凝めた手紙を書いた。而してそれを、折から檻外を廻つて來た巡査を呼んで、

「自分の死後、そつとこれを、妻と妾に渡して貰ひ度い。」と頼んだ。

獄の規則として、然ら云ふ事は、許されない事になつて居た。巡査は素より公然とそれを仲次する事は出來ない。巡査は一旦断つたが、一誠が泣いて頼むので、兎も角もと承諾けた。

七

一誠の死後、其の巡査は、其手紙を持つて關口の處へやつて來た。そして、

「どうもあの場合、たつて斷る事も出來ないので引受けましたが、事が露見すると大變です、困りました」と云つた。

關口は故とならず眉を顰めて、

「その位なら何故受合つたのだ。受合つて置いて手渡し、ないと云ふ法があるか。

一誠は墓の蔭からお前を怨むぞ。」

巡査も然う云はれて見ると、何うにも仕やうがなかつたのであらう。其の手紙を手渡し、なければ死者に對して嘘を吐いた事になるし、又手渡しをすることは職務に對して何うしても出來ない。因て即刻辭表を提出して置いて、約の如く一誠の家

に持つて行つて、妻と妾に手渡した。

巡査の心掛も亦立派なものであつた。が、一誠が死ぬ間際までも、猶且つ深く綾子とお秀の事を思つて居た事は此の一事を以て見ても分る。

夜嵐お絹と權十郎

此期に及んで未練は言はぬ
たい私ゆるる親方さんへ

おきぬが始めて男を知つたのは、十七の春であつた。大窪家の若殿に見染められて、其邸の妾に上つてからは、淺草鳥越の甚内橋畔りに住む、兩親も爲めに浮む事が出来た。

が、慙うして貧しい兩親に、吻と息を吐かせる間もなく、其翌年、兩親は、當時のコロリて死んで了つた。

後は誰一人廣い江戸の市中に、頼る者もなかつたので、妹のお峰まで、御殿の内へ引取られた。

慙うして神妙に勤めて居る内、其翌年、又、御寵愛を受けた、若殿にも死なれて了つた。

彼女は世を憐むて、一間の内にもみ閉籠り、看經の外餘念なかつた。

その内、後室様からはお暇が出て、小梅の別荘をも當てがはれ、まだうら若い身であるから、良縁があつたら縁付くなり、好きにしると言渡された。

而して、妹だけは殘して小梅に引取る。又御沙汰があつて、長い間の看病疲れもあるだらうから、箱根へなと湯治に行つたが可からうと、大枚のお金をさへ下さつた。

おきぬは、お言葉に甘えて、おさよといふ、氣に入りの女中を連れて、箱根の宮

の下の奈良屋へ出掛けた。

と、此處で落合つたのが、紀の國屋角太郎と云ふ、本町の藥種問屋の若旦那であつた。

けれどもおきぬはまだ其時は、角太郎の名も知らなかつた。歸つて見ると、何ぞ知らん、それは、隣の別荘に棲む男であつた。

二

憊うした縁から、おきぬは元來、大窪家の未亡人と云ふてはなし、殊に後室からのお言葉もある事、大窪家の許可をも受けて、立派に角太郎の妻になつたのである。けれども、茲に一つ困つた事は、角太郎には、お八重といふ、許嫁のやうな娘のある事であつた。

此のお八重と云ふ娘は、本石町の松坂屋といふ呉服屋の娘であつたが、繼父が番頭上りの人格の卑しい者である處から、チヨイ／＼母親の目を偷んでは自分を口説く。それが辛さに家出をして、死なうとまで覺悟したのを、角太郎の召使の姪に當る女が、救つて來て頼むて行つた程なので、本家では死んで了つた者と思つて居る。又娘も親父が辛さに今更名告つて出る譯にも行かぬ。と云ふ譯で厄介になつて居る内、いつの間にか角太郎と關係が出来て了つて居たのである。

けれどもお八重はおぼこ娘、おきぬは何しろ妖艶なお部屋様上りと來て居るので、先づ角太郎の心を惹く事は出來た。角太郎も夢中になつて居る。けれども何しろその娘が角太郎と同一軒に在つては、眞逆におきぬは角太郎の家へ乗込む事も出來ぬ。何うしたらあの娘を居ないものにする事が出來るであらうと、思案に餘つておさよに相談すると、此奴が頗る悪い奴であつた。而して「それにはいゝ事がござい

ます、萬事は私にお任せなさいまし」と云つて、當時おきぬは工面が好かつたものだから色々な者も出入りして居た中に、黒林玄達と云ふ藪醫に頼んで魔睡薬を貰つた。而してそれを歌留多會に托けて、我家へ呼んで、酒に交せて飲ませてから、お八重が心地が悪いと云ふので家へ送り返すと、其跡で僕の甚八と云ふ者に言合めて、甚八に擔ぎ出させて、大川へ投げ込んだあとへ、男の手跡——實は甚八に書せたもの——で、此程申上げし通り、今宵こそ首尾して待たれよかし、合圖はかねてお話し申せし通りなれば、必ずとも人に悟られぬ様に支度なされよ、まづは用事のみ取急ぎあら／＼かしく」との一通を残して置いた。

是にて角太郎は烈火の如く怒る。その後へおきぬが乗込む。素より玄達は何も彼も知つてる事故、此奴が我物にしやうといふので、お八重を甚八の投り込んだ後から、知つて居て大川から救ひ上げて連れて行く。後には云ふ事を聞かぬので、然る

屋敷へ自分の妹だと偽り、妾奉公に賣込まうとして、却つて悪事が露顯に及び、お八重は無事に母の手に歸り、自分は危く罪に陥らうとしたのを、手切を貰つて無事に事が済み、お八重は再び角太郎の妻になる事が出来たが……

おきぬは然うまでおさよが手甚く計らはうとは思はなかつた。而して後で聞いて後悔したが、自分が角太郎の妻に成り得た當座の嬉しさから、その罪も忘れて居ると、不思議な事には漸次角太郎が己れに對して冷淡になつて来る。そればかりではない。追々歸らぬ夜も多くなつて来る。然うして然う云ふ時には屹度悪夢を見る。それはお八重が死んだ事とのみ思つて居るので、其所爲もあつたのであるが、兎角は良心の苛責に耐へ兼ねて、時にはお八重の幽霊をさへ見る事がある。それを又角太郎は感付いて可笑な顔をする。それもその譯、角太郎は淺草の藝妓で常盤やの小久といふのが、もと／＼憎くはなかつたお八重に、そつくり顔が似て居るといふので

足繁く通つて居る内、生きてるお八重が母の手に歸つて、小久は子供の内に養女にやられた、その双兒だつたといふ事が分つたのである。而して黒林玄達からお八重の聞いた話で、お八重を無きものにしやうとしたのは、素よりそれがおさよの處置であるといひ條、もとはと云へばおきぬから起きた事で、おきぬ、おさよ、玄達、甚八、此の四人の所業だと云ふ事が分つたのである。

とは素よりおきぬは知らぬが、是ては夫婦中も冷たくなるより外はない。

三

因ておきぬは、角太郎が、餘り繁々家を明ける事が多くなつたので、何とかして藝妓の小久と、手の切れる工夫はないものかと、つい心細さの餘り相談したのが自分表面立つて媒酌人までしてくれた、勇次郎と云ふ御家人であつた。(おきぬは角

太郎が小久と關係の出来て居た事だけは知つて居たのである)

處が此の勇次郎と云ふ男は、實は角太郎には甚友達で、且つ又大窪家へも繁々出入して居た事のある、(そんな事から媒酌人もしてくれたのであるが) 本所割下水に住む幕府のお坊主、三崎潤悦といふものゝ次男であつたが、何れ當時の事であるから、ノリクテリした遊び人であつたに相違ない。

て、おきぬが此の愁嘆を、此奴美味いとばかり我手に引入れた。

又、勇次郎に取つても、おきぬは堅氣な妻と云ひ條、もとは大窪家のお部屋様であつたのであるから、口説き好かつたものに相違ない。

て、到頭二人はわりなき仲となつて了つた。

さて、然らなると、おきぬは熱する女であつた。殊に角太郎には表立つて、自分の罪惡をば責められぬけれど、いつもく出て行けがしに扱はれるので、心細く思

つて居た折からである。

他に勇次郎と云ふ深切な男が出来て見ると、其の方へ走り度い。て、自分も離縁をされたいばかりに、つい、悪いとは知りつゝ、故と角太郎の目につくやうに、一つ持出し、二つ持出し、大切な品物を他へ運んだ。

無論其の指金は、矢張りおさよといふ悪い女中だつたのである。

果して角太郎は氣が付いた。而しておきぬはそれがもとて離縁になつた。その離縁の相談には、紀角の弟の竹二郎も、勇次郎も預つて居た。

其後、角太郎は、望む處とお八重と夫婦になつた。謂はば、丁度好い處へ、お

絹が悪い事をしたやうなものである。

儲て、おきぬは離縁された後、下谷二長町へ土藏附の家を買つて、其處でおさよと世帯を持ち、勇次郎と同棲して居た。

けれども、勇次郎にも一片の良心はある。一時の出来心で纖弱い女を、誘惑はしたものの、いつまでもおきぬの色香にばかり溺れてる事は出来なかつた。

時は慶應の四年である。彼は簀笠に形容は隠せど、其下には白き手すきを綾取つて、或夜密かにおきぬを訪れ、中へは入らず一通の手紙を、おきぬに手渡して何處へか行つた。……

おきぬはブル／＼顫へながらその手紙を見ると――

拙者儀ふとした縁でそもじと深くなり、未の末迄と契りしが、先日不計兄義一郎殿に出會致候處、今度公儀の大變、三百年來徳川家のお蔭で、安樂に暮せし者が、おめ／＼主家の滅亡を見るに忍びず、平生の御恩を報ゆるは此時なりと、段々の説得に、始めて是迄の不身持を悔み、兄に勵まされて山内の彰義隊へ加はり、夫々軍議も決し、明晩あたりは一同に打て出づる筈なれば、叶はぬ迄も

一戦争する覺悟なり。就ては軍用金の爲めそもじの貯へ金の内五十兩だけを残り、跡を不殘借用致し候へど、主家回復の時に至らば、十倍にもして返濟申さん程に、必ず御恨み下さるまじく候。且つ明晩は此邊も戦争の街と相成哉もはかりがたければ、明日中に向島邊へお立退なされるべし。右等の事は同盟の誓もあれば、他言致すべき事ならねど、是迄の因みにより、内々お知らせ申候儀ゆゑ、ゆめく他人へ御洩しなされるまじく候。猶いろく申上げたき儀も候へども、取急ぎ候まゝ、あらく此のごとくに候、めてたくかしく

恚うして、二度目の良人、三崎勇次郎は、清水門で討死して了つた。剩へ下谷二長町の住居は、當夜上野の戦争の餘波を受けて、土藏ぐるみ皆焼亡せて了つた。

おきぬは着のみ着のまゝて逃出したのであつたが。おさよは到頭透れ丸に中つて死んで了つた。

彼女は萬一を期待して居た、勇次郎の討死を聞くと同時に、纔かばかりの貯へを待つて、一先づ猿若町の若山清兵衛（おきぬがいつも最負にして居た芝居茶屋）方に世話になつて居たが、旋ては其金もなくなる、清兵衛方にも居辛くなり、大窪家の奥に勤むる、妹のお峰に會つて、身の振り方を相談しやうと思つたが、間の悪い時は悪いもので、お峰も今度の騒ぎに付、後室様の御供をして、お國表へ發足して了つたとの事。

おきぬは今は誰頼る者もない。到頭、背に腹は換へられずで、清兵衛とも相談の上、其年の七月半ばに、まめ屋小きぬと名を改めて、猿若町から藝妓になつて出たのである。

處が錦切の勢ひ盛んにして、當時の官軍は至る處の茶屋青樓にて酒宴を張り、おきぬもその餘徳を蒙つて、思ひの外に繁昌したが、或日大垣藩の祝ひの座敷（此頃

越後路から無事に歸つて東京の兵隊と交代した）に招かれて行つて見ると、其處で邂逅つたのが小林金平——實は黒林玄達であつたのである。

三

玄達は元來おきぬとは、主従ほどの關係のある男であつた。處が是が一筋ならぬ悪い奴で、前におさよに加擔して、お八重に魔睡薬を飲ませて連れて行つてから、然る大名の妾に賣込まうとして、却つて自分の悪事が露顯し、手切を貰つて歸つた事は前に述べたが、此後もし紀角の方か、松坂屋から掛合を受けた日には、一言半句の言譯も立たぬ、一先づ後を晦ますに若くはないと、その後江戸を發足して、美濃の大垣の金平町に住む、弟の小宮利七なる者を頼つて行き、此處で名さへ小林金平と改めて、暫く弟の手助をして居る内、性來狡猾き生れつきとて、弟が金貨渡世

をして居るのを利用し、所々方々から賄賂を受けて、數多の金をも貯へた上、當時大垣の藩主が官軍に加はつて、東京を始め奥羽地方へ、日毎に兵を送り出すといふのを聞込み、醫者の心得の有るのを幸ひ、自分も官軍の一人となつて、越後路へ出張したが、素より軍の爲に働くばかりが、彼の目的ではなかつたのであるから、戰場にても到る處、危険を冒しては敵の金銀を分捕し、意外の利徳に有りついて、再び東京へ舞戻つて來て居たのである。

が、そんな事はおきぬは知らない。而して今は堅氣になつて、下谷御徒町の然る大名の邸宅を買込み、其處で金貨渡世をしてると聞き、其後も繁々招はれて居るうち、遂に落籍されてその妾となつたのである。

けれども元來おきぬに取つては、金平は家來同様な男であつた。且つ又金平は奢い男で、年にも似合はず非常な好色家であつた。おきぬは素より好いて居なかつた。

世が世ならば恚う云ふ者の妾に……と思ふ事も度々あつた。
 考へて見ると、二度目の良人、勇次郎の殺されたのも、此男に、ではなかつたけれど、矢張り官軍の爲であつた。
 然かも此男は官軍を笠に被て、到る處で悪い事をして來た男である。そんな事をおきぬは思ふ事もあつた。
 その内璃鶴と關係が出来たのである。

四

金平は或日、雪の降る夜遅く猿若町なるおきぬの妾宅を訪れた。其晩おきぬは璃鶴の家へ泊りに行つて居て家に居なかつたのである。金平は女に掛けては美醜を論ずる性ではなかつた。彼はつひ閨寂しさの餘り、女中の小澤おとみと云ふ四十五六

の女を口説き落して了つた。

處が其時の約束は、「あしたおきぬさんがお歸りになつても、お叱言を仰有らなければ」と云ふ事だつたのである。けれども金平はそんな徳義を重んずるやうな男ではなかつた。而して翌朝おきぬが歸つて來るや否や、烈火の如く憤つて、煙管を持つて立上り様、突然おきぬの髪を掴んで、肩のあたりをついけ様に打擲つたのである。そればかりではない。

おとみが一夜の情に妹を占て、己れ代つて金平の寵を得んものと、お爲どかしにおきぬに言つた言葉——ありのまゝに言つてお了ひなすつたら、或ひはお暇が出やうも知れぬ、然うしたら璃鶴さんと、自由に夫婦になれるてせう——と言つた言葉にうつかり乗せられて、實は璃鶴と關係が出来たといふと、暇は借置き、金平は、却つておきぬの黒髪を切つて、外出さへも出来ぬやうにして了つたのである。

おきぬは暫く辛抱して居たが、旋てはおとみの勤むるに委せて、璃鶴の處へ逢ひに行つた。と、璃鶴は大人しい男であつたから、始めて髪を切られた次第を聞いて、「今までは旦那持と知らなんだが、然うと知つてはお一人のお座敷さへも憚らねばならぬ仕儀、今日を限りにふつつりと、思ひ切つて下さいまし」と言はれて、おきぬは泣く泣く歸つては來たが、諦めても諦められぬは璃鶴が事。又金平の専横である。旋て又おとみの勤むるに委せて、璃鶴の處へ逢ひに行つた。けれども璃鶴は逢はなかつた。幾度行つても逢はなかつた。

おきぬは又おとみに唆かされて、璃鶴が家に入る處を突留めて入つて行つたが、突然男の膝へ突伏して泣出して了つた。面して剃刀さへ帯の間から拔出して、死なうと迄覺悟したのを、璃鶴に留められて果さなかつたのである。

然かも家へ歸れば金平が來る。思ふ男には表立つて添はれもせず、おきぬは少

少憤れ氣味になつた。而して思立つたのが金平を毒害する事であつた。

折しも金平は大晦日の夜から來て、四日迄病臥して居た。が直ぐに病氣は快りさうもなかつた。おきぬは此機を失してはならぬと、先づ一貼の鼠取藥を道明寺へ交ぜて飲ませて見たが、吐瀉惱亂するばかりで何の効も顯はれない。又七八日を過ぎて、十二日の晝頃、藥と稱して飲ませたが、親切らしく介抱する内、夕ぐれ頃より苦み出し、遂に七轉八倒の苦みをして果て、了つた。

而して遺骸は小林家の菩提所、上野山内の壽昌院へ葬つた。

おきぬは人目を憚つて、三七日迄は辛抱して居たが、旦暮憧るゝ其人に、逢たさ見たさを忍びかね、二月五日の夕暮から久しぶりて又璃鶴を尋ねた。そして、「貴方と夫婦になり度いばかりに、我身ながらも怖しい事をしてしまひました。」と打明けたのである。

璃鶴が驚きは言ふ迄もなかつた。彼は顔さへ蒼褪めて、齒の根も合はずガチ／＼顛へた。が、どうがなして此場を遁れんものと思ひ、「夫程迄に思つて下さるお心は厚いが、若しも此事が世間に知れれば、貴女は主殺し、繋がる縁の私とても同じ科。未を思へばお互ひに暫く爰を遠ざかり、世間の人の疑ひを招かぬ様にして下さい。また旦那の忌も果てぬに、世間晴れて夫婦になつたとあつては、益々人の口端にかゝるは知れた事、爰の道理を聞分けて、暫く足を抜いて下さい。」と言はれて、「女の浅い心から、夫程迄には考へませなんだが、少しも早う夫婦になつて、楽しい月日を送り度いばかりに、つひ後先も見ず飛んで來ました。必ず悪しくは思つて下さるな」と、別れたのが最後であつた。

おきぬは、其時、もう璃鶴の胤を宿して居た。……

五

七月十日の晝頃である。(是より先四月の初めに、おきぬは世の疑ひを避けん爲に此方へ引移つて居たのであつた) 浅草駒形町の四番地なる、おきぬが宅へは突然捕手が向つた。蓋し誰言ふとなく、おきぬは主殺してあるといふ噂が立つたのである。(それには無論璃鶴と関係があるといふ事が、主なるその原因でもあつた) おきぬは悪怯れたる色もなく、簞笥を明て衣類を取出し、紺の數寄屋の單物に、博多の帯をキリ、と結び、鏡に向つて髪を撫でつけ、腕守りさへ取換て、緩々支度をなしたる後、「大きに御待たせ申しました。」と言つて連れられて行つたのである。其翌日、捕吏の面々は、又しても猿若町三丁目の守田座へ向つて行つたのであつた。

折しも劇場は大入大繁昌で、龜山仇討の狂言最中、璃鶴は石井兵助の役に扮して親の仇に大井河原で行會ひ、大悪非道の赤堀が爲に及にかゝる斷末間、「アノ藤兵衛は何處へ行きし」と、見えぬ目を見張つた時、突然下手の浪幕を掻き分けて、御用の聲が懸つたのであつた。そして沸立つ見物を押鎮めて、捕吏は一先づ璃鶴を樂屋へ連れ込んだが、其處で衣裳を着換へさせて後、引いて行つて了つたのである。

六

おきぬは素より死罪であつた。けれども一々罪を數へ上げては、二つの命を取るとても、猶憐らぬ大罪ではあるが、はや臨月も近いといふ、腹の子に罪はない。と、お上の慈悲で醫者や産婆の手當を受け、清らなる獄舎に繋かれ、食物さへも心付けられ、手厚く介抱を受けたので、其年十一月八日の夜、やすくと男の兒を産ん

だが、母子とも何の障りもなく其兒は兼ての願ひに依り璃鶴の店受人なる何某が引取り、力松と名づけて千住竹の塚なる或商家へ里子に預けたが、虫氣もなくよく育つと聞き、おきぬも今は思ひ置く事更になしと、お仕置を願ひ出たが、産後の疲勞を補ふため、百日の間は獄舎にて手當をさるゝが御法との事に、是非なくも惜くはあらぬ命を存らへ、指折數へてその百日を待つ内、明けて明治も五年の春、金平が一周年忌もはや過ぎて二月二十日。前夜の内に御沙汰を受けたので、彌々今日が此世の名残よと、兼て用意の時小袖、縮緬の亂縦縮の三枚着に、縷子の丸帯を端長く結び、艶も變らぬ下げ髪の美しき粧ひして白洲へ出たが、判決の申渡しを受け

夜嵐にさめてあとなし花の夢

の一句を口吟む折しも、その夜嵐に逢はせてやらう、今生の別れを告げよと、役

夜嵐お絹と權十郎

人の聲の下から、引れて出づる腰繩の璃鶴を見るより、おきぬは支へる獄卒の手を拂ひ、璃鶴の側へ駈寄るや否や、パタリと坐つて物をも言はず、窶れ果てたるその面影を眺めて居たが、やゝ有つてわつと泣出した。

璃鶴もともに涙含んだ。

が、屹と心を取直して、言ひ度い事は澤山あるが、此期に臨んで未練は言はぬ。たい私ゆる親方へ、こんな難儀をかけたのが、死んでの後迄迷ひの種……。必ず怨んで下さるな。頼むは後世を助かつて、未來は岐度夫婦になつてと、此期に及んでも二世を誓つて後、日頃お弱いお身故、大切に付けて下さいまし、マア大變にお窶れなすつてと、そのみ言つて泣いて居たが。犯せる罪は悔ゆるとも、人をは何て恨みませう、必ずともに後々の事まで、心にかけて下さるな、及ばずながらも後の世の、回向は私が致しますと、優しい言葉に満足して、おきぬは泣くく駕に

乗つた。

獄卒は簾を下げる。中では又わつと云ふ聲がした。

其日、おきぬはその駕で、千住小塚原へ擔かれて行つた。而してお處置になつて了つた。

七

けれども璃鶴は同腹と云ひ條、始めからおきぬに相談を受けた譯ではなかつたので、是は單に隱匿罪と云ふ事で徒罪二年半を言渡されたが、素より虚弱な俳優の事として、荒仕事も出来まいと云ふお慈悲から、懲役所の看護人となり、以前に變るなりふりも、自ら招く罪科と、身を慎んで忠實々々しく勤むる内、旋て免されて青天白日の身となつたが、後には成田屋の恵みを受けて、市川の流れを別つ、川崎屋の權十郎と、其名も高き俳優とはなつた。

勝安房と金瓶大黒の遊女

涙を呑んで女郎を口説けば
釣臺の文箱は艶書の山

勝安房守と云へば直ぐに江戸城明渡しを聯想するが、當時官軍に屬して江戸へ入込んだ諸藩の末には、往々無頼の徒があつて、市中の町人を脅かし、或ひは無銭で飲食したり、無代で品物を持去つたりする者が多かつた。

て、諸方から出す難澁願の届は、毎日勝安房の手に、數十通の多さに及んだ。けれども、幕府には早や夫を取締るべき勢力がない。又一方には主家存廢の難しい運動を控へて居るので、有繋の勝安房も殆ど閉口し

て了つた。

が、忽ちトンと袴の膝を打つて、破顔一笑し、執事を招んで、直ぐに、
「供廻りの用意をせい」と命じた。

そして、自分は麻上下の、安房守の支度美々しく着飾り、長柄の駕籠に乗つて早屋敷を打立つた。

門外まで出ると、家來の者が、

「何方へ参りまするか、」

と、尋ねるので、勝安房は駕籠の中から、

「浅草觀音へ参詣致すのぢや、」と言ふ。

是は殿には狂ぜられたかと、供廻りの者は驚きながら、仕方なしに浅草へ行けば安房は觀音へ参詣して後、

「是から吉原へ繰込め」と言ふ。

家來共は彌々呆れたが、ても仕方がないから又主人の言ふがまゝに、吉原の遊女屋金瓶大黒へ駕籠を昇き入れた。

すると勝安房は徐々と駕籠を出て、店番の妓夫に一禮し、

「自分は勝房安守……主人金兵衛に面會致し度く、参つた趣を取次いで貰ひたい」と言つた。

妓夫はハツと平伏し、旋て此趣を奥へ通じると、金兵衛は驚いて飛んで出て、

「先づ〜此方へ御通り遊ばせ。」

と、廣間へ案内して、扱て「御用の趣は？」と尋ねたが、時が時、人が人、内心では御用金でも言付けられはせぬかと心配して居た。

處が、安房は面を正して……「少々御無心の儀あつて」と言ひかけたから、金兵衛

はソラ来たと思ひ、

「年來御高恩を蒙りまする私共、いかやうにも御奉公は仕りまするが、何を申すも此の時節……」

と、逃げるを制して、

「控へさつしやい、金兵衛、安房守は決して金銭の無心には参らぬ、無心と申すは今日只今當家の太夫一同に面會が致し度いと云ふ一儀、近頃迷惑であらうが枉げて然か計うてくれまする様に。」

と言つた。因て金兵衛は赤面して座を退り、程なく抱の遊女三十餘人を、各々美しく着飾らせて、此廣間へ同道すれば、安房は此時衣紋を正して正座に直り、花を欺く數多の美人を膝近く手招いて黙禮したまゝ、涙をばら〜と流して暫し差俯向いて居たが、忽ち顔を上げ、いとも慎重なる語調にて、

勝安房と金瓶大黒の遊女

「和女達の御高恩を蒙つた徳川様には、今度大政を奉還致され、三百年來目出度住はせられた江戸城を御開き遊ばされた事は噂にも聞いたてあらうが、唯今の處では、開かせられた徳川様も、引繼がれた官軍も、まだ諸事行届かずして確乎とした御取締も相付かず、之れに因つて官軍々勢中の良からぬ者共、常に市中の町人を困しめる故、誠に以て愍然至極なり。安房守其職に在りとは云ひながら、唯一人にては何とも救ふに術なく、權現様以來子の如くに思召された江戸町人の難儀を見て、此の安房腸を掻き擽られる程心苦しく存ずる。因つて安房が折入つて和女達へ頼み度は、和女達の許へは官軍に名ある隊長筋の人々も參られる事と察すれば、和女達は日頃の手練を用ゐてその人々へ話し、何とぞ罪なき町人共をば未派の兵士の苦しめざる様、只管頼んでくれまいか。と云ふ一條である。勝安房守とも云はれる余が、亂暴兵士の取締すら出来ぬとて笑はゞ笑へ、時節到來、政道の一部を手弱き和

女等へ頼むも萬々據ろない事であるぞよ。徳川様の御高恩を思ひ、江戸市中町人の難儀を悲む心あれば、和女等もよもや余の頼みを聞かじとは思はずして、斯くは推參致したのである。各々どうぢや。」

としみと説き諭したので、中には涙含む者も多かつた。

美人等は、且つ泣き、且つ激して、皆委細承知の旨を快答した。

が、其後數日を経て、金瓶の遊女一同より、釣臺一荷、勝安房の許へ届いた。

「ホホウ是は妙な物が來た哩、」

と思ひながら受取つて見ると、それには大文箱に數十通の艶めかしい遊女の文が入れてあつた。

勝安房は一々披見して見ると、みな水莖の跡も麗はしく、

「先日お頼みのことは、△△様や○○様へ、くはしく願ひ置り云々、」

と云ふ事が、異口同音……ではない、異手同文に書いてあつた。
が、果して夫が功を奏したものと見え、幾程もなく町人共の難澁願は、頓と出ぬ
様に成つたとある。

當時の△○今在りや否や。

(此項特に鈴木光次郎氏の著書に依る)

富貴樓のお倉と龜次郎

親は仕事師育ちは淺草

二人揃つて京都へ駈落

一

お倉は仕事師の娘であつた。親父は新門辰五郎の子分て、淺井丑之助と云つた爲
頭。生れは谷中茶屋町であつたが、育ちは淺草藏前、今の松葉町。

お倉はその頃お竹と云つて居たが、十五の時に淺草地内、即ち今の公園内に居住
して居た、星野某に貰はれて、その養女になつて居たが、養父の星野が二天門へ、
掛茶屋を始めた處から、お竹も其處の店番をして居ると、持つて生れた縁緞が仇と

富貴樓のお倉と龜次郎

なり、半四郎娘と評判を取つたが、勘からず客足をも惹いた中に、幕府の御鐵砲師松屋鐵五郎と云ふのに思はれて、その妻になつたのは、花の盛りの十八の時。

然るにその鐵五郎は、色白く苦味ばしつた美男で、平生髪を總髪にして、黒羽二重の紋附を着流し、故と羽織を着ずの一本差しと云ふ扮装で、女に騒がれる質であつたから、お竹が嫁ぐと間もなく鐵五郎は、淺草花川戸の附木屋の娘、お照といふのと味な交情となり、摺つた揉んだのいささつのあつた揚句、自ら進んで内藤新宿の遊女屋、豊倉屋の抱妓となり、「お倉」と云つて披露目をしたのは、お竹が廿一の春の事であつた。

此の豊倉屋は當時新宿隨一の大見世だつたのである。

二

借て龜次郎は高田馬場の植木御用達、齋藤彦兵衛の次男であつたが、兄が淺草猿若町の芝居茶屋松川屋の娘を圍つて置く内、松川屋の戸主がなくなつたので、其處へ養子にやられたのであるが、性來遊び好の怠惰者と來て居るので、店は井辰と云ふ若者に一任して、自分は山谷堀の小萬と云ふ藝妓の家へ入浸つて居た。

此の小萬は當時三十五六の大年増であつたが、頗る美人の爲に誰が目にも二十七八にしか見え、剩へ人に知られた名物女で、越後の名物角兵衛獅子を踊るのに、緋縮緬の長襦袢をも、露はに出して逆立をする事が十八番なので、一に又鯨鏝立の小萬と異名をされて、土地でも評判の藝妓であつたが、深くも龜次郎に打込んで、我家に引入れては面白可笑しく仇に浮世を送つて居たのである。

一日龜次郎は兩國の待合へブラリと出掛けて行くと、其家に幕府の御作事棟梁、堀内大隅守と云ふのが居て、

富貴様のお倉と龜次郎

「地内に掛茶屋をして居た堂前のお竹が、新宿の豊倉で、お倉と云つて女郎に出て居るさうだが、一晩交際つてお倉を買つて見ては何うか、」と言ふと、龜次郎は直ぐにも行きたかつたが、ふと自分の服装に氣が付き、

「是ではお供が出来ませんから、早速服装を拵へてから、重ねてお目に掛るとしませう、」

と云つて其日は別れて歸つて了つたが、何處で何う算段したものか、龜次郎は二三日を経ると、立派な服装を拵へて來た。

時しも夏の盛りの事で、大名縮の上布の帷子に、献上博多の帯を締め、細の小紋の羽織を着て、散緒の雪踏をチャラつかせて、懷中にさへ二十兩程の金を支度して、「サア出掛けませう、」と云ふ騒ぎ。塀内は大又と三人、兩國を出て、駕に乗り、新宿の豊倉屋へ上つて、塀内はお職のお若、龜次郎は二枚目のお倉を敵娼に派手に遊

んだ。

是が抑も龜次郎とお倉が縁絲を結んだ最初で、お倉も勤氣離れて待遇した處から、龜次郎も三日程流連して歸つて行つた。

が、其後龜次郎は、小萬に小遣を強請つては新宿に通ひ、お倉の方でも酷算段の身上りしては、龜次郎を呼ぶ始末に、遂には高利貸に酷しく攻められ、長襦袢一枚で顛へて居た事もあつたが、それにも係らずよく賣れて、お職のお若が落籍されて後は、獨り全盛の花を咲かせて居た。

三

其内、お倉の色香に迷つて、足繁く通つて居た八丁堀の定役小頭の高橋藤七郎は、お倉の身の代を拂つて受出し、八丁堀に妾宅を構へて、其處へお倉を住はせ置さ、

富貴樓のお倉と龜次郎

繁々其處へ通つて居たが、龜次郎をばお倉の方から手紙を出して切々と呼び、召使の女には鼻薬を與へて密會をして居たが、此事いつしか高橋の耳に入り、着のみ着のまゝで放逐されたので、已むなくお倉は龜次郎の知合なる江戸橋の粉倉と云ふ寄席へ預けられて、暫く其處の厄介になつて居る内、席亭の主人い組の頭久太郎は將來の事を案じて、お倉を一先づ品川の大見世湊屋へ百兩にて身を賣らせ、其金を龜次郎に與へ、名さへお組と改めてお倉は再び右禰を取る身となつたが、程なく銀座の役人譽田某に落籍されて、深川五本松の畔なるそが別荘に引取られる事となつた。

四

けれども龜次郎との悪縁は容易に切れず、前に高橋に懲りたるおくららは、見着けられない内に出奔するに若かずと、龜次郎と牒し合せ、着類を持出させて其處を夜

逃し、二人は手に手をとつて吳竹の根岸の里に逃げ、御隠殿下に爲す事もなく半年許り暮したが、遂には米屋、薪屋、酒屋、魚屋に至る迄負債が嵩み、二進も三進もならなくなつたので、又も相談の末今度は吉原水道尻の引手茶屋新尾張から前借三十圓で叩分の約束で見當藝妓に出る事となり、借金の方をつけて淺草馬道四丁目の裏長屋へ龜次郎に世帯を持たせて貢ぐ事となつたが、三十島田の年増藝妓に搗て、加へて藝はなく、唯饒舌る事と豊倉屋のお倉といふ名前とて座敷をして居るに過ぎないので、借金は殖える計りていつ返せると云ふ當もなく、身體茲に谷まつた苦し紛れ、堀内大隅守が公方様に附いて京都に居る事を思ひ出し、龜次郎と申合せて吉原へ出入の小間物屋の品物を借受け、是を賣飛して十二兩の金を得たので、二人揃つて上方へ道行と極め込んだが、東海道を行つたのでは、追手に捕まる恐れがあるので、故々道を匹谷街道から甲州へ足を向け、甲州から信州へ出て、中仙道の安旅

富貴櫻のお倉と龜次郎

籠屋へ泊つて、漸との思ひて京都へ着いたが、直ぐに堀内の旅館を尋ねると、生憎な時は生憎なもので、堀内様は四五日前に江戸へ歸られたとの事に、二人は失望落膽したものゝ、幸ひ江戸で懇意にして居た、新門の辰五郎が、一橋卿の部屋を預つて京都に居ると聞き、二人は辰五郎に會つて仔細を語り、十兩の金を貰つて大阪に下り、北の新地の清元の師匠露助の世話で同地の高田屋から藝妓に出たが、其後南の宗右衛門町伊丹幸の龜吉の妹分となり、小龜と名告つて住替へて、家業を續けて居たが、其内幕府が瓦解したので、何がな商賣を目論まんと下阪して居た金座の元役人長岡久次郎に會ひ、身の不幸を訴へて金を貰ひ、五年振て江戸へ歸つて見ると江戸は東京と改まつて世間の様子も變ると共に、近頃横濱が開けたとの話に、二人は同道して同地に出掛け、お倉は藝妓となつて高田屋お倉で稼いで居る内、天下の糸平たる田中平八に知られ、糸平の勧めに委せて、同地の相生町へ富貴樓と名づけ

た料理店を開業し、お倉は齋藤の姓となつて公然龜次郎と夫婦になり、當の糸平大盡と、當時の神奈川縣令であつた陸奥宗光の最負の爲に、思はぬ繁昌を極めたが、其後火災に遭つて類焼したので、更に尾上町に新居を移して開業し、お倉は益々辣腕を振つて働いた爲め、伊藤、井上、大隈、其他、京濱の紳士が悉く來て最負にしたので、數年の間に巨萬の富を作つて、富貴樓の名は天下に知らるゝに至つたが、夫龜次郎は二十八年に死し、お倉は明治四十三年の九月七十五歳を一期として、是も夫龜次郎の後を追ひ、大磯の招仙閣に於て病歿したのである。

井上馨とおきみさん

附り中井櫻洲の妻

かたみとなつた鏡ぶくる
大隈へ入れた一札

一

君尾は祇園中西屋の藝子であつた。當時君尾には島田左近と云つて美男子の客があつた。左近は九條家に取入つて、少太輔にまで進んだ男で、手腕もあるし中々金使ひの荒い男であつた。然かも京都の花柳界に於ける人氣と云つたら大したもの此の男にばかりは藝妓の方から血道を上げて騒いでる者も少くなかつた。けれども何うも君尾は蟲が好かになかつた。彼方で切々と通つて來れば來るだけ、

君尾は猶厭になつた。だから一度も首を縦に振らなかつた。

それが、高杉晋作の一座で、四路開太と云ふ人に會つてからは、猶厭になつた。開太は勤王家であつた。又君尾も勤王好きの藝妓であつた。そんな事が縁になつて、二人はつい深い間柄になつて了つた。

それ以後と云ふものは、猶島田が厭になつた。あんまり可煩く左近が口説くと、「あんたはんは勤王嫌ひ、妾は勤王好き、心が會ひませんさかい好い加減に置きなはれ、」など、つひ口走る事もあつた。

二

其内、戀しいく開太さんは、何か大切な用があるとか云つて、江戸へ行つて了はれた。

井上馨とおきみさん

幾ら君尾が其袖を捉へて、引留めても何の甲斐もなかつた。
憊う云ふ時、一番可憐しいものは其の方のお友達である。會つて、何をがな情人の噂がして見度い。

けれども一座の高杉さんも、何處へか行つて了はれた。

又しても——可煩く通つて来るのは島田左近である。

「あゝ、此の方がもし聞太さんやつたら……」

と君尾は幾度思つた事があるか知れぬ。

此日も丁度左近の座敷へ聘ばれて居た處であつた。急に他家から貫ひの口が掛つたので、ヤレ嬉しやと飛んで行つて見ると、折も折、時も時、客は夢寐の間も忘れる事の出來ない四路關太の同志寺島忠三郎と云ふ人であつた。

然かも寺島は唯獨り座敷に床の間を脊負つて坐つたなり、藝妓も居ず、舞妓も居

ぬ。

君尾も何か理由ありとは思つたが、つか／＼と其傍へ行つて、膝に手を置き、

「ま、お久しう……、あの方は今何うしなはつて……」

となつかしげに其顔を見上げた。

寺島は苦い顔をしながら、

「實は……と、聲を密めて、「高杉も君と聞太との間を見て、餘りデレ／＼して居たので、『好い加減にしないかい』など、聞太に意見を言つた事もある。けれども、幾ら女が戀しいからとて、大事を忘れる聞太ではない。あの時偶々江戸御殿山に於て、外國公使館を立てると聞いて、同志は心外で耐らない。忍び難い千鈞の一髪はあつたらうと思ふが、聞太もそんな事でお前を振り切つて旅立つて後は江戸に入り、到頭公使館を焼き拂つて了つた。」

井上馨とおきみさん

「まあ、……」

「首尾好ら目的は遂げたのぢや。けれども幕府が血眼の搜索には、暫くは外出も出来なかつた。でも達者で居る。喜んで好いぞ。が、斯く云ふ某一人だけは、京都に歸つてお前を聘んだのだ。勤王藝妓のお前を聘んだのだ、と云ふ譯は……目下の京都の形勢ぢやが……、又島田等の様子ぢやが、……、成程……、」

君尾は知つて居るだけの事は耳打をした。

「……其處で甚だ言難い事ぢやが、是と云ふのも國の爲ぢや、君の爲ぢや、四路も可愛からうし、厭でもあらうが、島田の意に従つて機密を探つてはくれまいか。常盤御前の例もある事。何分頼む。これ此の通りぢや、と、手を突いてお辭義をした。

「ま、勿體ない、寺島さま、貴方も御國のお爲めとは申しながら、舞妓風情の私に……、」

と君尾は涙を拭つて、寺島の手を取り上げて、やゝ暫く首垂れて居たが、やがて決心をしたやうに、

「お國のお爲めとなら爲方おまへん、たゞ四路はんはんに此の心の苦みを、察して下されて、ナア……、」

「うひょしくい、」

寺島も目を連睨いた。

君尾は永い間寺嶋の膝に突伏して泣いて居た。

三

斯う云ふ譯で、君尾は死んだ心になつて、到頭島田の意に従つた。そして勤王黨のために機密を探つた。久坂玄瑞等が島田を刺したのにも、與つて力あつたのだと

井上馨とおきみさん

云ふ。

幕府の追手が緩むと間もなく、聞太は久しぶりて京都に歸つて來た。そして再び君尾に逢つた時は、どんなに嬉しかつたらう？ 二人は以前にも増して愛し愛された。けれども運命は然らう長く二人を一緒にして置かなかつた。二人は再び別ればならなかつた。

と云ふ譯は、其の頃は已に高杉晋作が開國論に傾き、勤王黨の連中も大分それにかぶれて居たので、聞太もその一人であつた處から、旋て其の主張が昂じて洋行熱となり、伊藤俊介、其他同志四五人と共に横濱から外國船に乗つて、出奔をする事になつたのである。

て、聞太は其の別離に臨んで、君尾に「俺だと思へ」と云つて、暫し別れの形見として正宗の一刀を贈つた。又君尾は、「妾も常に肌身離れずお身を守りますやう

に、しと云つて、美しい錦の鏡囊を送つた。

後年聞太の井上侯が、反對黨から暗打に會つた時に、危い一命を免れたのも、此鏡囊があつたばかりであつた。

四

後の井上侯爵夫人は中井櫻洲散人の細君だつたのである。それが何うして井上侯の細君になつたかと云ふに、斯う云つた珍談がある。

當時大隈の梁山泊が築地にあつた。今の遞信省のある邊りである。處が場所が場所だけに、此處へ出入る連中の中には、随分偉い豪傑連が居た。西郷隆盛を筆頭に、大久保利通、木戸孝允、井上馨、江藤新平、其他誰、其他彼。中井弘もその一人であつた。

井上馨とおきみさん

處が良人の縁故から、中井の細君も時々出入して居た。それを見染めたのが故井上侯で、有繋の豪傑も此の細君を一目見ると同時に、何うしたものか深い戀に落ちて了つた。けれども其の細君には、何しろ中井弘と云ふ歴とした良人があつた。彼は唯人知れず戀々の情に耐へ兼ねて居るのであつたが、或日我慢が仕切れなくなつて、此の思ひを大隈に訴へた。そして何とかなるまいものであらうかと言つた。

と、大隈は苦もなく引受けて、

「一つ中井に談判して見やう」と言つたが、直ぐに中井を呼んで此旨を通じた。

處が中井もさるものである。

「よ、それ程迄に井上が戀焦れて居ると云ふのならくれてやつても可い。だが、其處に一つの條件が要る。眞實焦れて居ると云ふのなら、一生涯見捨てませぬと云ふ證文を入れる事だ。」

洒落な人の事として慥う言つた。と、大隈も、

「それ面白からう」と手を拍つて、又の日井上の來たのを幸ひ、

「偕て井上、此間中から貴公の頼じて居る、あの中井の細君の一件だが、若し貴公が彼女と結婚して必ず一生連添ふと云ふ誓ひの證文を吾輩に入れるなら大いに成立さして見せやうぢやないか、」

と先づ其の戀の眞實なるや否やを確かめた。處が井上は眞實處の騒ぢやない。一も二もなく承諾して、

「イヤモウそんな事ならどんな證文でも書く。直ちに書く。何とか一日も早く彼女の承諾する様に頼む」と、則ち即座に、貴殿令夫人、當方へ譲受け候以上は、一生決して離縁せず、大切な妻として可愛がり候ふは勿論也、右の趣天地神明に誓ひ仍て如件と云ふ意味の趣を、一札にして大隈に渡し、さて雙方は改めて、金井之恭を

井上卿とおきみさん

媒酌人に、芽出度正式の結婚式を挙げたとある。

今考へて見ると聊か怪しからぬ話のやうでもあるが、當時は一意唯國家あるのみ
の連中だから、一婦人の事などには餘り重きを置かなかつたものと見える。

陸奥宗光と瀬川

兄は水戸へ弟は京都へ
葉櫻に寫る「瀬川」の灯

一

抑も十一代將軍家齊が、在職殊に長く、多くの子供があつた爲め、老中も大いに
その始末方に困難したが、果は諸侯の嫡子のない處へ、ドシ〜と養子にやつて、
何うやらお茶を濁して居た。

紀州藩(茂承)も亦その濁された中の一つで、老公(舜恭院)はこれが爲に隱退は
したが、然し國政の實力は、依然として老公の手にあつた。

陸奥宗光と瀬川

處が此の老公に従つて居たのが、陸奥のお父さんの伊達宗廣で、此人が、陸奥にはお祖父さんに當る人の後を承け繼がれた時は、伊達家（陸奥は後に自分でつけた姓である）は僅に跡目知行三百石に過ぎなかつたが、藩の監察であつた事が八年、宗廣が精勵の功を以て五百石に加増せられた。其の上陸奥のお父さんは、紀州藩の執政であつた處の、中山筑後守（三千石）に識られて居たので、宗廣から献策する處の事は、何一つとして用ひられざるなしと云ふ有様であつた。

又且つ陸奥のお母さんと云ふのは、宗廣には後妻ではあつたが、渥美源五郎といふ人の娘で、此の渥美氏が又老公附の執權職と來て居るので、藩の政事は何に依らず、此の渥美、中山、伊達、此の三人して左右する事が出来たばかりか、然かもその後楯には、老公が附いて居ると云ふのであるから、當時に於ける宗廣の勢力と云つたら、それこそ飛ぶ鳥も落す程な勢であつた。

處が、其後、江戸詰の水野土佐守が段々勢力を得るやうになつた處から、國詰と江戸詰との間には、何かにつけて意見の衝突が起り、遂に嘉永五年十二月二十二日、公儀を楯に、「御不審の次第有之」とばかりて到頭宗廣は顯位より打落され、剩へ幕府の附家老安藤飛彈守の邸へお預けと云ふ事になつた。時に宗廣は五十歳であつた。因て伊達家では餘儀なく養子を（五郎——後に廣島縣令を勤めた、有名な伊達五郎である）を迎へ、特旨を以て知行三百石で、跡目相續を仰付かり、新に小普請組に入れられたが、更にその翌年正月、家名改易の嚴命に接して、伊達家は則ち和歌山城下十里以内には住む事が出来なくなり、一家は泣く泣く家敷を拂うて、高野山麓鯉野村といふ寂しい處へ引移さるの止むなき次第に立至つた。其時の事である。まだ九才の小童であつた宗廣の一人牛麻呂は、我家の改易と聞くや否や、幼な心にも残念で耐らず、大いに怒つて、床にあつた、伊達家重代の太刀を抜き持ち、表

陸奥宗光と瀬川

の方へと駈け出さうとしたから、家人は驚いて彼を抱き留め、義兄の五郎はその短氣を叱つて、

「そんな向不見な事はしては可けない。」

と訓したけれども、彼は泣きながらも中々聞入れる氣色がなく、縁側へ出て手洗鉢の水で泣顔を洗うて來ては、幾度となく義兄に向つては、

「何故留めるか？」と議論を吹かけるので、五郎も之には持て餘したと云ふくらゐ。實に彼が藩の所置を憎むの情は深くもその骨髓に徹して、少年ながら朝夕常に復讐を口にして居つた處から、遠くもあらぬ京の五條から來た、或る書肆の主人は、頗る感心して了ひ、

「あんたがもし紀州家に復讐しやうと思ふなら、宜しく最初に紀州の領分に隣りして居る、天領(幕府の地領)の代官になつたが宜うおませんか、」と言つたが最初。

成程然うだと牛麻呂は雀躍して打喜び、直ぐにその男に連れてつて貰つて京都に行き、或る老吏の食客となつて、四五年此處で勉強をしたが、彼は此處のみでは嫌らなく思つたか、遂に意を決して江戸へ出やうと思ひ、再び鯉野村へ歸つて、父母に別れを告げると、旅装勿々伊勢路を差して出發したのが、彼がまだ十五の時。それから二三年は行方も知れなかつた。

二

麻布高野山の出張所に、近頃棲込んだ寺男があつた。彼は朝未明に起出て、手に竹箒を持つて庭掃除をする。草摺りをする。それが済むと暗い臺所へ入つて、籠の下を焚付ける。生れはたゞ和歌山の者だとばかり、氏素性も分らない。和尚は同國の縁固から、頼まるゝまゝに置いてやつたのであつたが、若いに似合はず忠實忠

陸奥宗光と瀬川

實しく働くので、重寶に思つて居ると、或日突然お暇を下さいましと願ひ出た。何云ふ譯かと聞いて見ると、或る處の漢方醫に、草根木皮を刻む職があるから、其方へ轉じたいと云ふのであつた。和尚も出世の爲になる事なら、何をしてもいい、と云ふので、心地よく暇をくれる。と、寺男は程近い、漢方醫の家に雇はれて、板戸の入つた玄關の間で、澁紙の上に坐りながら、木の根を刻み、薬研を廻し、眞面目になつて稼いで居たが、此處も亦暫くあつて暇を取ると、今度は小さな九尺二間を一軒借りて、其處で切々と寫字の内職をし、幾らかの賃錢も取れるものと見えて、それを學資に、安井息軒、水本成美などの塾に通つて居たが、後には甚い疥癬を病んで、目も當てられぬ姿と落ふれ、將に路傍に墮れやうとして居たのを、折から通り懸つた神田お玉ヶ池の外科醫、花岡某に救ひ取られて、其家へ連れて行かれたが。「一體何うして江戸へ出て來たのか？」と聞くと、口を噤むて何にも言はぬ。けれ

ども人品と云ひ、舉動と云ひ、決して賤しい素性の者ではない。

「まあ、好いから當分家に居て、緩りと養生するが好い。その内身體がよくなつたら、何處へ行くなりお前の勝手だ。又行處がなかつたら、何うせ人手も要る事だから、私の家に居てもいい。」

と、花岡は深切に言つて世話をして居たが、其内漸々病氣も快くなる。若者は別に行處もないと見えて、臺所の拭掃除をする。屋敷の居廻りの草摺りをする。時には幾らか心得もあると見えて、薬局へ來て手傳ふ事などもあつたが、そのまゝずるゝべつたりには、書生とも付かず食客とも付かず厄介になつて居る内、何うしたのか、此家の入院患者で、吉原から來て居る瀬川と云ふ花魁が、大層彼に思ひを懸けた。

一體、遊女の病氣の事として、素より大した病氣でもなかつたが、彼女は晝間も怠屈な時は、蓐の上に寝轉んで本を讀んで居る。旋てそれに飽きると媚めかしい風をして、ブラ／＼縁側を行つたり來たり、時には藥局へ來て書生を調戲ふ事などもある。

その癖別に不亂な様子があると云ふてはないが、何しろ病氣揚句の怠屈な時として、誰の事でも人懐かしさうにする。その内何處で何う見染めたものか、屹と目を留めたのがその若者の姿で、彼女は街路病人と聞く内からハヤ夢中になつて同情し始めて居た。

が、旋てその病人も快くなつて、其處等邊りをブラ／＼するやうになると、直ぐ

呼込んで來て我が部屋に連れて來る。林檎を剥く。蜜柑を御馳走する。

「貴方は甘い物がお好き？」とばかりて、鹽瀬の鹿の子を取寄せる。

何しろ大店の女郎の事として、金廻りも好い。女も佳い。又、誰一人知己もない、都會の行路病人上りの若者と異つて、ソレ新造だ、ソレ遣手だ、茶屋の女將だ、幫間だ、藝者だと、お見舞客の絶間もない。

けれども然らう云ふ時はいつも若者は追ひ出されて了つて、後になると又部屋の中へ呼込まれる。

虐待をされて居るのか、優待をされて居るのか、此の處一寸分らない。

然し、その内、誰言ふとはなしに、あの男は實は紀州藩の大番頭で、八百石取りの家に生れた、若様だと云ふ事が知れた。

さア妓は猶大變である。

「ねえ、私の眼に曇りはないでせう……」

とばかりで院長を捕へても物話ける騒。

「貴方は何或然う堅いの？」と聞くと「だつて親父が幽閉されて居て、女狂ひでもあるまいからなア」と笑ふ。

妓は猶よくなつた。

「て、貴方は是から何うする意なの？」

「實は京都へ行き度いんだが、金がなくて弱つて居るんだ。」

「京都へは何しに行くの？」

「坂本龍馬つて人に會ひ度いんだ、」

「其人に會へばい、事があるの？」

「うむ、無言い、事がある。」

妓は友禪の蒲團の下から美しい鼻紙入を出して、

「ぢやア此處に二十兩あるわ、是だけあつたら京都へ行けるでせう、院長さんには内證よ、」

と云つて暫く見た事のない黄金を二十枚延紙に包んで握らせた。

「だけれど、私を忘れちや厭よ。」

「うむ、何で忘れるものか、此の深切は死んでも忘れん、」

四

若者は、惜しき袂を別つて、江戸を後にし、今しも箱根へ差掛つて來た。と、恰も京都の方から遣つて來る、一挺の駕籠があつた。

會符を見ると「薩摩藩中村某」と、その駕籠に記してあるが、其の筆跡が、どう

陸奥宗光と瀬川

見ても義兄の手跡に相違ない。

若しやと思つて、覺束なくも、路を引返して其後に續いて行くと、前なる駕籠は唯有る立場に着いたが、中から出たる人を見ると、擬ふ方なき兄の五郎であつた。

「ヤア兄上か？」

「牛麻呂か？」

「叱！」と五郎は手眞似て制して、奥深き處に至り、

「父上は其後田邊の配所に、前後九年の、星霜を送られたが、文久元年酉の六月、藩では觀自在院殿の三十三回忌の法會を營むので、赦令を布き、此時父上も宥されて再び故郷和歌山に立歸られたが、伊達家は僅か七人扶持を給せらるゝ計りて、大番格を以て小普譜入りとなつた。此のやうであつたから、家政は大いに缺乏して殆んど一家の口を糊するにも足らぬ有様とはなつたが、父上は少しも恨む色なく、城

下はづれの太田村といふ處に、天目庵といふ書屋を作り、藩士に和歌や佛學を教へ、政事の方へは一切遠慮して口を出されなかつたが、兎角する中和方も知つての通り、時勢は漸々と變つて來て、薩長土の兵は禁裏を守護し、幕府二百年來の勢力は挫けて、十四代將軍家茂公は上洛あるとの事に就き、父上にも日頃の抱負を献策するゝところがあつたが、藩の俗吏は遂にお父上の意見に従はなかつたため、是では最早や仕方がないと、茲に全家は脱走の意を固めて、予もお父上に伴はれて、京都へと上つた譯である。

「然らばお父上も今は京都に？」

「然らば、」

「してお兄上は？」

「幕府の老中小笠原圖書頭が、歩兵隊を率ゐて上京するのを喰ひ留め、畏き邊りよ

陸奥宗光と瀬川

りは銀造りの太刀を賜り、天晴二百年來の人物であると迄評判を取つたぞ。而して長の年月一家を苦めた彼の政敵水野土佐守も遂に予が勢力には勝れず、到頭禁錮の身となつて了つた。」

「それはお芽出度う存じまする。」

牛麻呂も心から嬉しさに莞爾する。五郎は猶も言葉を續けて、

「猶々語り度き事もあれど、今は或る筋の密使となつて、東下するの際であれば、又の會合を約すとしやう。して其方は？」

牛麻呂も負けては居ず、

「是々の次第にて、外科醫の家にて遊女に見染められ……、」

「何ぢや、會ふ早々……、まあ、よいわ、達者で何より結構ぢやつた、然らば是にて別れやう。」

「兄上にもお身をお大切に……、」

「其方も健固で……、」

五郎はヒラリと駕に乗つた。

「あらば、」

「あらば……、」

五

京都では無論龍馬にも會つた。又龍馬の紹介で、幕府の海軍奉行勝麟太郎の創

た、神戸の塾に入る事も出来た。又坂本に連れられて薩摩にも行き、此處に五六十

日も滞在した後、長崎に趣いて、伊藤俊輔にも會ふ事が出来た。其後の行動は茲に

語らない。が、それと云ふのも皆お前の情の力に外ならない。

と、當年の伊達小次郎は、太政官出仕を仰せ付かると共に、早速瀬川を苦界から落籍せて、葉櫻の色も翠の墨田堤に、彼女が源氏名をそのまゝに、「瀬川」と云ふ貸席を出させて、その恩を謝し、時折は己れも烈しい勤めの隙々には、馬車を停めて彼女を慰める事もあつた。

イールスと喜遊

嘘といひ誠といふも
満らぬ業だと故と一篇

横濱岩龜樓の高臺に、酒池肉林の歡を盡して、一世の豪遊を試むるは、是ぞイールスと云ふ亞米利加人である。

碧眼敷髪、千里の外の人ではあるが、遊蕩に馴れた洒落男で、通辯を取巻に、昨日も今日も流連し、黄金白金惜氣も無く時を散らすは、此樓の抱への喜遊といふ、遊女に現を抜かしての事である。

けれども喜遊は病と稱して、いつかなイールスの席へは待らぬ。宵に見えたる三日月の、チラと姿を見せたるばかりで、今宵も部屋に引籠つて居る。

イールスは今日と云ふ今日、我慢を仕兼ねて、樓主を呼付け、通辯をして恚う言はしめた。

「毎日々々、今日が出る、明日は出るとお體裁のいゝ事ばかり吐しをつて、一體いつ出る氣なんだ。若し、何うしても厭だと云ふんならそれで可い、此方も強ひて出て來いといふ程の權力もないのだから……。」

まアそれはそれで可いとして、縁のないものと諦めて、イールスさんは是から船へ歸ると有仰るのだ。就いては此處に條件がある。此間あの女の爲に出した枕金の二百圓は、今日唯今倍にして返して貰はうぢやないか。金を取つて置いて約束を果さないのは、詐欺の仕業だと恚う有仰るのだ。て若し其金を返してくれなければ、

是から日本の官衙へ訴へに行くと思つて居るのだ。」

今まで黙つて聞いて居た樓主は、急に顔色を變へて恐縮した。そんなら早く金を返せばいゝのだけれど、其處は何しろ人に情を賣らしめて、我頸を肥す底の營業者である。それに當時の二百圓と云へば、一夜の枕金としては安くない金である。其奴を四百圓にして返せば恐れる。けれども若し返さなければ、どんな憂き目を見やうも知れぬ。

と、樓主は腑甲斐なくも外客の權幕に怖れをなし、手を合せて通辯を拜み、「まあく一寸お待ちなすつて、な、何とかいゝやうに計らひますから」と言つたが、直ぐに退つて廊下へ出た。そして喜遊の部屋へ飛んで行つたのである。

喜遊は其時、床に向つて花を生け、香を聴いて樂じて居た。見れば見る程美しい女である。一點の朱唇、芙蓉の臉、暖雪の襟元匂やかに、髪は激瀧たる浪の光を帯び、嬌魂稜々として四邊を拂ふとても形容すべき風情。

樓主は怯々と喜遊に向ひ、「此間からも度々言つた事だが例のイール様の事、今日迄は病氣だ」と言つて斷つて置きましたが、お前さんを働に出さないとなると、此間の二百圓を倍増にして戻せと云ふ嚴談なんです。私も迂濶に金子を受取つたのは不覺だつたが、知つての通り不勝手で、今四百圓と云ふ大金を差出した日になつて見ると、此の岩龜樓は明日から直に戸を閉てなければならぬ。そればかりでは無い。金を戻せば屹度世間から馬鹿な奴だと笑はれるに定つて居る。就いては此處が相談なんだが、何うか死んだと思つて諦めて、目を塞つて一度出てはくれまいか。イールス様とて同じ人間ぢや、如何に目色が變つて居ればとて、取つて食はうとは

有仰るまい。それに又外國人は女に情が脆いと云ふから、お前さんも腕次第で満更身の爲にも悪くもあるまい。千圓萬圓引出すのはお茶の子さいさい、ぢやありませんか。

喜遊にはその浮かれ調子がイヤであつた。又何うあつても當時の異人に身を委せる事はイヤであつた。喜遊は品よく容を正して、「有仰る事は御尤もではございますが貴方は私を此樓へお連れになる時に、暮々も異人さんには肌を觸れさせないとお仰つたではございませんか。屹度恁麼事になりはしまいかと思つたものですから、あれほど念を入れて置きました。今更そんなことを有仰るのは、殘酷ではございませんか。人の賤しむ遊女となつて、女の操は穢してをりましたも、父や母に貰ひました此體を、むざむざ異人さんの慰み物にされる事は私や厭でございませぬ。固だ不開化だと言はれましても、どんな責苦に逢ひましても、此事ばかりは御断り

申します。」と言つてキツパリと斷つた。涙は紅の臉を潤して、靜かに鼻紙で面を蔽う風情は又なく艶に哀れてあつた。

樓主も有聲に少し怯げたが、と云つて慾には換へられない。

「そりや御前さんの言はれる事は、一から十迄皆道理ぢや。それだから又此の私も、樓主の身として抱へのお前さんに素頭を下げて頼んでをるのぢや。私が一生の誤りは金子を取つたのが悪かつたのぢや。それさへなければ何の事もないのぢやが、私ぢやとて、こんな家業はして居るものゝ、牛でもなければ又馬でもないから、お前さんとの約束を忘れた譯では決してない。けれども何しろ今も言ふ通りな譯で、その金の一件ぢやが、若しお前さんが此處で出てくれないとなると、全く明日からは戸を閉てなければならぬのぢや。此家の破滅になるのぢや。何うか爰の道理をよく聞分けて、私の災難を救うと思つて、コレ、此の通りお願ひをします。」と言つて

樓主はビヨコ〜と敷居際へ頭を下げた。

喜遊はツンと眈を上げた。けれども亦しを〜となつて、ハラ〜と涙を流し、

「それぢや宜しうございますから、今夜から出ると有仰つて下さる……、」と云ふ聲も涙に曇つた。

「何、それぢやア出て下さるか？」と、樓主は慌て、顔を上げると、

「それで四百圓が助かります。ハイ〜何うも、何ともハヤ、御禮の申しやうも御座いません。又もや御意の變らぬ内……、」

と樓主は慌て、イールスの部屋へ駆け戻り、「旦那々々」と兩手を舉げて、泳ぐやうな手附をして、

「何うかお喜び下さいまし、喜遊は出ると申しました。今迄病氣と申上げましたのは、あれは實は皆な嘘なので、實はイールス様を嫌つて、イヤサ、病氣には病氣で

イールスと喜遊

すが、漸と説付けて今出す事に致しました。何ともイヤハヤ永い間失禮を、是て四百圓が助かります。」と、手柄顔に通辯に云へば、通辯も苦笑ひしながら、此事をイ

ルスに囁く、イールスは早や有頂天になつて、
「ソレ、藝妓、呼ぶ宜しい、騒ぐ、有ります、」など、云ふ騒ぎで、自分も立つてステ、コを踊る。

其夜の騒ぎは又格別で、豪遊四隣を壓仆したので、廓内でも皆岩龜樓へは、福の神が舞ひ下りたとさへ噂した。

けれども、いつまでも喜遊は出て来ない。イールスは耐り兼ね、

「早く……、早く……、喜遊さんを、呼んで来る、ある」とばかり、今は杯盤をも飛ばさんず不機嫌な色を示した。

樓主も驚いて喜遊の部屋へ飛んでいくと、「コレサ、喜遊さん、何うしたものぢ

や、イールス様がハヤ待兼山の齋鳥だのに、まだ御化粧が済みませんか、」と言つたが、寂として人の氣色もない。ハテ變だ、便所へても行つてるのか知らん、と思つて何心なく次の間を見ると、座敷には屏風が立て懸けてある。

「それぢやア又拗ねて寐て居るのだな、」
と思つて屏風を引退けて見ると驚いた。

喜遊は、友禪の夜具の上に、從容として自及し果て、居る。然かも其姿は、盛粧美々しく、鬘甲の櫛笄をも挿し、烏雲の鬢一髪をも亂さず、花よりも紅なる血汐は、淋漓として俯伏に仆れて居る。

又、枕邊には名残の一通。樓主は慌て、手に取あげて見ると、墨の黑白もにじみ勝なる涙の露。されど水莖の跡も麗はしく、

今はの際に一筆書殘しり、私事外國人に身を任せ候は、如何に傾城遊女な

イールスと喜遊

ればとて、忍ぶに難き事に候。さりながら、我意にのみ任して従ひ参らせねば、御主人の御難儀外にも見做し難く候まゝ、死をのみ急ぎり。何とぞ妾の淺ましき死屍をイールス様に示し給はりて、我が日本の蒼生は、賤しき傾城の憂き川竹に沈む身なりとも、御國振を恥かしめざる赤心の程を御知らし下されべく、これのみ今生の願ひにて候。

露をだにいとふ大和の女郎花

ふるあめりかに袖はぬらさじ

樓主は餘りの事に腰打抜かして驚き呆れ、暫時は言葉も出ななんだが、辛くも人々に告げ知らせて、イールスをも導きて見せしむれば、有紫のイールスも肝を消し、喪然として立去つた後、喜遊の名内外に高く、彼の絹衣美食に飽き、然かも外人の獵色に身を任す洋妾等も、一時は身を耻ぢて辭し去るもあつたと云ふ。

猶、喜遊は幕府の醫、太田正庵の一人娘で、名を知慧女と云つたが、家政紊亂して父母病に臥し、又救ふに道なかりし時、自ら乞ひて身を吉原の甲子樓に鬻ぎ、その孝養を盡したけれど、天此孝女に恵まらずして、反つて父母を黄泉に奪ひ去た。時に彼女は芳紀十五。雪膚、花顔、誠に國色であつたので、名を子の日と改めて、後に全盛を極めたが、甲子樓業を廢するに及び、遂に岩龜樓に移つたのである。

山縣有朋とお壽美さん

謀られたりな伊藤俊介
却説友子夫人の貞節

お壽美さんは其の昔秀才と稱へられし野村子爵の令妹であつた。郷里は公と同じ萩の城下で、當時お壽美さんのお母さんは、未亡人ではあつたが三人の兒女（入江九一、野村子爵、お壽美さん）を相手に、良人の名を辱めぬ寡婦生活を續けて居た。その頃公は狂介と云つて、短衣、弊袴、一本差しに脛高々と、足駄を穿いて、兩腕を捲つて、お壽美さんの兄さんの、入江や、伊藤俊介など、一緒に松下門塾に通

つて居た。

が、ふとお壽美さんの艶なる姿を見てより、何となく心が時めいた。そして野村家への出入が一層頻繁になつた。

お壽美さんは初中終お母さんの傍に居て、初々しく針仕事をして居る………
そんな事も思の種になつた。

又、お母さんも、好い人である……

謹厳な公は、チャンと袴の膝に手を置いては、二人の様子を凝視して居た。けれども何と云て出す隙もなかつた。

二

時に弟の野村氏は、松蔭の間部下總守狙撃に加はり、事露見して獄舎に投ぜられ、

山縣有朋とお壽美さん

兄の入江氏も亦、大原三位と謀つて、長井雅樂の公部合體運動を妨ぐる爲め、君公の關東參府を伏見に擁せんとして果さず、續いて獄舎の人となつた。

「然ぞお心配で御座りませう……」

狂介は取る物も取敢ず、急ぎ藩の手元役に伺候して、只管兄弟の赦免を乞ひ、歸つて留守中の跳始末を身に引受けて、残る母に對し、又妹に對し、何くれとなく心を配るのであつた。

が、彼が友を想ふ悲しき心の裏にも、猶ほ涙に暮るゝ壽美子嬢の艶なる姿は、雨に惱む海棠の花の、それにも増していとしさを増すものであつた。

彼は遂に耐へ兼ねて、想を口に現はしても見た。

と、壽美子嬢は何故か、袂を重ねて俯向いたまゝ、涙を流して答も得せぬ。

山公には始めて合點が行つた。それは俊介が先だつて早くも彼の女と甘き戀を眼

き合つて居るのであつた。……

二

けれども友は助かつた。

野村兄弟が赦免せられて、郷里梨木に歸つて來たのは、其翌年の事であつた。

其後公は奇兵隊の總督として馬關に行き、暫く茲に駐まる内、不圖した縁から又同地の豪族、石川良平の愛嬢と烈しい戀に陥つたが、昔氣質の父有念が、不義はお家の御法度とばかり、何うしても首を縦に振らぬのを、漸と宥めて首尾よく我手に入れたのが友子夫人であつた。

旋て巳未の難に續く櫻田門外の變があつて、その年も暮れると、藤公は、兼て父重藏翁に懇望して居た壽美子嬢賞ひ受けの一件が、入江兄弟の色よい返事と共に纏

まり、文久三年江戸に滞在中、壽美子嬢を迎への爲に萩に歸る間もなく、葦燭の典を擧げたが、如何なる動機か、壽美子夫人は、慶應二年の秋、公の不興を蒙つて、破鏡の嘆を見るに至つた。

それに引易へ、此方は山公、琴瑟彌よ和合して、山公の權威益す高く、聲望彌よ加はるに従つて、一家の中にも漸く和氣は霽然として漲つたが、友子夫人は病を得て、不幸松子嬢を忘れ片身に、永遠の別れを告げた。

關伽の水そゞぎながらもおもふかな

きのふはともに手向けしものを

それは、公の、友子夫人の、墓前へ手向けられた和歌である。

三

今の夫人は新橋の名妓吉田屋のやまとと云ふ婦人である。本名はお貞さん。

公に仕ふるに貞淑温良、細心密慮、未だ曾て一度も公の逆鱗に觸れた事がない。と云ふのを以て見ても、如何なる婦人であるか、分るであらう。それにも係らず彼の女は内縁の妻である。

公の後進門下の人達は、彼の女を徒らに日蔭の花として捨て置くに憚らずとなし、故桂公を總代に、正夫人として御披露あつては何うかと計つたところ、公は何故か黙して答へず、貞子さんは御厚意は忝けないが、妾の如き賤しき者を、然やうに遊ばされては、名譽ある公の歴史を穢すものでござります。と云つて固く辭退したさうである。

新喜樂のお金と權之助

洞抜の上へ幫間の羽織

つゝまる處は茶の宗匠

一

別頂富貴樓のお倉と共に、明治の二大女將として聞えたる新喜樂の女將お金は、弘化三年の生れてあつた。

親父は木屋芳藏と云つて、日本橋高砂町の横店に住んで居た、銀座の小普請方であつた。お金は其の四番目の娘で、小供の時の名をおせいと云つた。八才の時には親父に先立たれ、母親が大勢の子供を抱へて途方に暮れて居た處から、其翌年おせ

いは九才の時に、本所松井町の美濃屋と云ふ老人夫婦の家へ貰はれて行つたのである。

然るに此の夫婦者は、いつも容色の美しい女の子を貰つて育て、は、用が足りるやうになると妾奉公や藝妓にさせるのを家業にして居る事が後に知れたので、おせいの母は驚いて取戻さうとしたけれども、そんなら今迄の食雑用、二十兩寄越せとの文句に、娘は取戻したし金はなして困つて居たのを、其頃本所に居た追手風と云ふ力士の女房が聞いて氣の毒がり、今は宿は大阪へ行つて居て留守であるから私に二十兩の金は迎も出来ないが、半月程過ぎると歸つて来るから、それ迄の處をと、自分か嘗て吉原の遊女屋稲本に初代小稻と呼んで出て居た縁から、おせいを稲本へ質に入れて、二十兩の金を調べ、夫で美濃屋の手は切つて了つたのである。

處が追手風は大坂から直ぐに九州路へ廻り、殊に興行先が面白くなかつたので、

新喜樂のお金と權之助

金の當も外れて了つて何うする事も出来なくなつた。

處へ當時吉原は、安政三年の大地震の後で、稲本では妓共が少いから、寧ろ證文にしておせいを禿に使ひ度いといひ出したので、到頭おせいは質流れとなつて、二代目小稻の禿となり、名を小きんとさへ改めされた。

然るに此の小稻と云ふ妓は、頗る今盛の妓であつたが、水道尻の楨庄と云ふ引手茶屋から送られて來た客で、今紀文と持囃された、山城河岸の大盡津藤香以の事で、朋輩の鴉鳥と争ひを生じた結果、香以は三百兩の金を双方へ出して小稻を止めて鴉鳥の容となり、鴉鳥は其金で新妓を突出し度いと小きんを望んで來た。つまり津藤一件の伸直りの證であつたのである。で、小稻も望まれて見れば否とも言へず、早速に承知をすると、相談は瞬く間に極つて、鴉鳥は花鳥と名を變へて、小金は其の妹分となり、二代目鴉鳥と名乗つて仲の町から突出されたのが、彼女の十四の時であつた。

あつた。

二

恠て質流れから禿となり、夫から又花魁になつたお金は、二代目の鴉鳥の名で賣出したが、十七の花盛りには、遂に二枚目を張るの全盛を極めた。

當時谷中の三崎町に、三河屋權右衛門と呼ぶ豪商があつた。其長男を權之助と云ひ、至つて手堅い者であつたが、俳諧を永機に學び、號を永斗と云つて居たが、碌に人交際もしない處から、乞食永斗とさへ綽名があつたにも係らず、お金の鴉鳥に夢中となつて足繁く通ひ、親に身受の相談迄したが、親父は承知しないので、永斗は二百兩の金を持つて家出し、千駄木の小倉と云ふ親戚の質屋へ相談に行つた。すると小倉では詮方なしに、家主小兵衛に永斗の權之助を預けて、稲本方へ身受

新喜樂のお金と權之助

の掛合に行つたけれども、何しろ鴉鳥はまだ二十七の年明までには八年も間があつて、一年に千兩づゝ稼ぐとしても、八千兩は取れる身躰なので、却々稻本では承知しない。て仕方なしに歸つて来ると、永斗は是が爲に氣が變になり、稻本の二階へ雪踏穿のまゝ、駈上り、名代部屋の櫥子へ帯を掛けて、首を縊つて死なうとするのを、漸との事で止める騒ぎ。

然し鴉鳥は義理と情に惹かされて、然うまで想つてくれるものをと、互に手に手を取合つて、廓を脱出す覺悟をした。

三

鴉鳥は胴拔の上に、人に女と氣付かれまいため、幫間春孝の羽織を借りて着て、刎橋から逃だしたし、何處へ行くとの當もなく、一旦武州熊谷まで落延びたが、再び

江戸へ取つて返して、根岸は御隠殿の龜屋甚藏と云ふ人の別荘に隠れて居た。

が、其内人相書が廻つて喧しくなつたので、いつまでも打遣つても置かれず、入丁堀の定役高橋藤七郎（お倉を身受した男である）の取計らひで稻本へ掛合つて貰ひ、鴉鳥の身代金八百兩を永斗の實家から出して貰ふ事にして埒は明けた。

けれども其時三河屋の二番々頭勘兵衛は來て二人の前へ五十兩の金を並べ、親子縁切の書附を書かせて、それと引替に持つて行つて了つたのである。

四

おきんと權之助の二人は、仕方がないので其の五十兩を持つて、橋場の料理屋川口の隣へ、四疊半に二疊の家を借りて、兎も角も世帯を持つた。

其時永斗の權之助は二十五の、鴉鳥のおきんは十九の、何方も男女の厄年であつ

た。

儲てその五十兩も使ひ果した後は、種々な悲劇もあつて、遂に此處にも居られなくなり、下谷龍泉寺町がまだ村であつた時分の、棟割長屋に移つた頃は、長脇差上りの十郎兵衛と云ふ侠客から、二朱八の金さへ借りる。

又其の男の差金で、權之助の實家へ強請に行つたが、首尾よく外れて何うする事も出来ず、人の情で下谷の提灯店横町へ、道具屋を初めて見たが、相變らずの左り前で、此處も亦思はしからず、夏は蚊帳がなくて仕方なしに夜一夜蚊燻しをして一刻替りに寝る有様。又冬は晝間店へ掛けて置く風呂敷を掛布團代りにしたので、足の先が暖まつたと思ふとハヤ夜明近くなる始末に、搗て、加へて權之助が、大の怠惰者の嫉妬焼と來てるので、辛抱が遂げられず、其年の内に別れ話をして、おきんは横濱へ出掛けて行く。

又權之助は坊主になつて、詫をして實家へ歸參が叶つたが。一旦持崩した身は究屈て帳場格子の中には居られず、おきんが吉原の梶田屋から二度の勤に現はれた頃、又もや家を飛出して逢ひに來たので、おきんは京町に喜美深川といふ茶屋の株を買つて與へ、女房まで見立て、世話をしたが、是も程なく遣切れないとて廢業し、茶の宗匠となつて世を送つて居たと云ふ。

伊藤博文と三芳太夫

見付けられたは百年目
身受せうにも金がない

一

その頃、長州は攘夷論の最極點に達して居た。男子は勿論、婦女子に至るまで、白鉢巻しろはちまきを纏たぎにかけて、長刀ながなたを使つかはうと云いふ騒さわぎ。

遙々はるかそれを鎮めやうと思つて、歐羅巴えうろぱから歸つて來た俊介は、山口やまぐちに着くが否や直ちに君側きんそくの役人やくにんをして居る、毛利登人まうりのおんとに事情じじやうを打ち明け、「君公きんこうの前まへに出て、殺ころされても苦くるしくないから、何どうか逢あはしてくれ、」と頼たのんだから、毛利まうりも大おほいに驚おどろいて、

「まあ此この國難こくなんの時ときによく歸かへつて來た。早速まっせき君公きんこうに逢あはせてやるから、安心あんしんせよ、」
と言いつてくれた。

その翌日よくじつ俊介しゆんけいは、家老かろう始めみな列席れつせきの處ところに呼出よびだされたが、先まづ其その見聞けんもんして來ただけの事ことを、地圖ちづに依よつて説示せつじするより外ほかはないと、英吉利いぎりすは憚かうて、佛蘭西ふらんすは憚かうてと、一々いちいち地圖ちづを指さして歐羅巴えうろぱの文化ぶんかの形勢けいせいを説明せつめいして後のち、

「今正いままに横濱よこはまに集あつつて、馬關ばくわんを砲撃ほうげきしやうとする處ところの、十八艘じゅうはちぶねの船ふねは斯かの如ごときの構造こうぞうである。大砲たいほうの數かずは幾門いくもん、彈藥だんやく、兵器へいきの備そなはつて居る事ことは斯か々々、それに抵抗ていかうして戰爭せんそうした處ところが、勝かてる目的もくてきがないのみならず、毛利家まうりけが僅わずかかに一藩いっぽんを以もつて之これに抵抗ていかうして何等なんらの益えきがあるか、それよりは寧むしろ茲こゝで和睦わかくして、王政わうせいを復古ふくこして、日本にほんの國こく力を統一りよくするに如ごとくはない。」

伊藤博文と三芳太夫

と云ふのであつた。

藩議は動いて、兎も角も、戦争は控へる事になつた。

勿論其間にも異議はあつて、中には俊介を暗殺しろ、など、云ふ者もあつたが、幸ひに藩も之を制めて無事なる事を得て、旋て俊介は久保孫三の案内で、宍戸璣等が君命によつて迎へに来る。俊介は家老十一人を連れて馬關に出て、さしも由々しかりし馬關事件も、談判は和議の結了をした。有繋は俊介だと譽めた者がある。俊介は嬉しくて耐らない。

其夜一杯呑みに行つたのが、稻荷町の林家と云ふ揚屋であつた。而して此處でお梅に會つた。

二

船を出しやらば夜深に出しやれ

帆影見るさへ氣にかゝる

長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ門司が關、下の關とも名に高き、西國一の大湊。北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩灣、唐阿蘭陀の代物を、朝な夕なに引受けて、千艘出づれば入船も、日に千貫目萬貫目、小判走れば銀が飛ぶ、金色世界もかくやあらん。沖に何まつ檜垣作り、十四五端の廻船に、船頭舵子は襦袢着て、足踏伸ばす梶枕、中に頭の毛剃九右衛門。それにも似たる今のお客、船問屋の綿屋から、通つて来るは船乗り商賣。つひ此間までは恁う云ふ氣にもならなんだが、林家で招ばれたあのお客、一目見てから何う云ふものか、身に染々と忘れられぬ。それも其筈綿屋の且那は、金より外に目のない人、それには引易へあのお方は、お國の爲とは云ひながら、今にも戦が始まらうとしたのを、氣にかけて遙に異國から歸つた人。

伊藤博文と三芳太夫

。と三味線を膝に置いて、近松の丸本を眺めながら、熟々、と嘆じて居るのは、所も馬關稻荷町、いろはと云ふ置屋の養女、お梅と云ふ藝妓である。

折しもあれ、格子の外へ、カレコロと云ふ日和下駄の発音がして、

「今晚は、お梅さん、林家へお座敷です、」と云ふのは箱丁。

お梅は林家と聞いて、直ぐに三味線を膝から下すと、簞笥を開けるも後や先、支度も匆々にして貰つて、切火を打たれて外へ出た。

二

此日も丁度俊介は、唯一人で座敷へ来て居た。

お梅には、素より良人と云ふてはないが、綿屋の客の船乗りが、二月も前から來なかつた、と云ふ事が嬉しかつた。それだけお梅は船乗りの事を氣にして居た。

又俊介の事を慕うて居た。

「まあようこそ、」と會釋をするも笑ふも女らしくつゝ、ましやかさ。

俊介も笑かたまげて、満足げに手招きする。

二人はさしつさゝれつして、夜の更くる迄酌み交はした。而して、いつの間にかはや世間も寢鎮まつて、寂として夜の更け渡つたのも知らなかつた。

旋て俊介は酔倒れて、其儘其處に鼾を掻く。

お梅は熟と浪の音に、耳傾けながらその寝顔に見惚れて居ると、二人の座敷を音もなくスウと開けて、入つて來た女子があつた。

女子は宛て錦繪からでも抜け出たやうな、媚かしい風をして居る。

お梅は何心なく行燈の灯を掻き立て、其方を見ると、ハツとなつて、ふるりと顛へた。

それは京屋の抱妓の遊女、三芳太夫と云ふ遊女であつた。
廓の掟は土地の藝妓が三味線以外に客を取つた事が疑はれても、その土地には居られない事になつて居る。

三芳は、

「おや、貴女はお梅はん……、」と言つた。

お梅は、

「御免やす、御免やす、」と云つたが、三芳は大層機嫌を損ねて、

「何れ此の御挨拶は後程に……、」

と言つて、ピタリと襖を閉て切つて歸つて行つてしまつた。

後俊介は目を覺したが、お梅は何とも云はなかつた。而して酔覺めの水を持つて来る。茶を煎れる。深切に世話をしたが、借て納まらぬは此夜の仕儀。

四

夜が明けると益々騒ぎは甚くなつて、幾らお梅が京屋へ行つて、三芳太夫に會つてお詫を言つても、誤つても、聞かれない。

土地の顔役中清事、中村清五郎に仲へ入つて貰つて、取なして貰つても、矢張り聞かれない。

その頃の馬關の遊女は、大した權式のあつたものである。

お梅は素より養家のいろはでも、殆ど始末に困つてしまつた。と云つて苦情の言はれた義理ではない。それも只の抱妓と云ふのなら、又住み替へさせて濟せやうもあるが、お梅は養女だからそれも叶はない。

お梅は到頭絶對絶命、最早此土地では藝妓として身を立てる事は出来なくなつて

しまつた。そればかりではない。

「もし此事が綿屋の旦那に聞えたら何としやう？」

と云ふのが辛いお梅の人には言へぬ思ひであつた。

切迫詰つて、

「伊藤はん、何うしませう……。」とその智慧を借りやうとすると、

「それぢや乃公が落籍けやうぢやないか。」

と云つたが肝心の金がない。

「何うしませう？」

「困つたなア……。」

と、その時紙門の蔭から聲がして、

「そのお金は私が一時お立換へ致して置させよう。」

と言つたのは林家の女將、お徳と云つて義侠氣のある女であつた。
悉くしてお梅は、いろはも承知で、纒かの金で落籍される事になつた……

伊東巳代治とおみよさん

お前もみよなら俺もみよだね
藤公を口説いたも此の手

—

伊東巳代治と云へば今でこそ正三位勳一等子爵宮中顧問官など、澄して居るが、彼は元長崎通辭の粹で、外國語は早くから旨かつたが、男兒志を立て、郷關を出づ、學若し成らずんば死すとも還らずか何かで、僅か許りの旅費を頼りに、遙々辿り來つたは二百里の長途。

先づ神戸の居留地で、外國人のボーイとなつたが、此處ではたしか學費要らずの

勉強をして、何うやら語學の方も達者になつたので、早速に其處を飛出し、差當り飯に有付くその爲にと、兵庫縣の雇となつたが、縣令が替ると同時に、突然「御用無之に付辭表可差出候事」との辭令を受け、樹から落ちた猿同様、一時は頗る窮迫したが、苦しい時の神頼みて光村彌兵衛(神戸の酒商)に紹介状を書いて貰ひ、以前兵庫の縣知事をやつて居た事もある、當時の工部卿伊藤博文を頼みに、漸々とやつて來たは、東海道五十三驛。其旅費は素より光村から出て居た。

偕て、東京へは着いたものゝ、別に是ぞといつた知己も親類もない事だから、草鞋の脱ぎ場所に當惑したが、幸ひ是迄時々下らぬ投書を朝野新聞に出して居た事のある縁故から、先づ兎も角もと西鴻訥と云ふ人を訪問して、此處で暫く厄介になつて居た。

其當時(明治七八年)の事である。

伊東巳代治とおみよさん

此の西瀉訥といふ人物は、随分永い間判事をして居た事のある男で、名は訥だが至つて能辨家で、明治の初年頃に既に「佛蘭西六法」ぐらゐは研究して居た程の法律學者で、又氣性の面白い男だつたので、始終五六人の學生を世話して居た。

すると或日の事此の西瀉は、細君と下女とを連れて何處へか出掛けた。その留守に又、外の書生達も、近所へ遊びに行つて了つた。

と、後へ残つたのは、是から伊藤藤公を口説かうと云ふ伊東と、おみよさんと云つて、小綺麗な島田に結つた此家の小間使ばかりだつた。

おみよさんは、座敷で、細君のいつも坐る傍の處へ坐つて、何やら紅い布片を縫物して居る。

伊東はパタリと法律書を伏せると、ノヅリノと其處へ遊びに行つた。そして、何かの談話の次手に、

「僕もみよだがお前もみよだね、」

と先づ笑談の口を切つた。

すると女の方でも、顔紅らめながら、

「まあ然うてございますわね、」と微笑んだが、

「イエ、同じみよでも殿方は何處まで出世なさるか知れませんが、女のみよては仕方ありませんわ、」と言つた。

巴代治も笑ひながら、

「然うかい、僕にもそんなに出世が出来やうかね、」と言つたが、何かと笑談を言ひ合つてる内、話に段々實が入つて來た。

二

すると間もなく西潟が歸つて来て、玄關を明けても誰も迎へに出て來ぬから、「ハテ伊東が留守居をして居る筈であつたが、」と、不審を懷きながら奥へ入らうとすると、二人は慌て、出て来て、胡亂くして居る。

西潟は何心なく二人を熟視すると、みよは、伊東が、西潟から出して置けと言付かつて居たはがきを二三枚持つて居るし、伊東は、みよが、細君から、洗濯をする様にと言付かつて居た下帯を持つて居た。

因て西潟は可笑さに堪兼ねて噴き出しながら、「折角書いたはがきを洗濯すると字が皆消えて了ふよ。又下帯は郵便箱の口が小さいから中へは入らないぜ、」と嘲弄つたから、二人は顔を眞紅にしながら、コン／＼とそれを持換へて、極り悪げに立別れた。

其後みよは何うなつたか知らんが、

「同じみよでも殿方のみよは、」と云はれた一言に、伊東は大に發奮して勉強もし、又おみよならぬ伊藤公にも見込されて、今の身分になつた事だけは事實である。

板垣退助と女乞食

くれてやつたは姉さんの晴衣
悪戯小僧は棧敷の殿様

—

それは恰も嚴冬の候で、ヒュー／＼と吹荒ぶ木枯しは、路上の砂を卷いて、寒氣は彌が上にも烈しく、所謂肌身を裂くと云ふやうな酷寒の日であつた。
一人の女乞食は、伯の門邊に立ち、幼い乳呑兒を抱いて、いとも隣れげに食を求めた。

見た處、餘り卑しくもない、容貌も美しい、まだ若い女である。

それが何うして此處身分になつたらう……、此の寒さだと云ふのに薄い衣服のぼろ／＼のを着て、兒は餓に泣き、女は寒さに、ガチ／＼と顫へて居る。
伯は、幼な心にも、此の乞食が可哀さうで耐らず、資性慈仁の心に篤い彼は、涙を誘うて、無限の憐情に堪へなかつた。

そして、何なり與へて遣り度いと思つて、身の周圍を胸はしたが、別に何も持つては居なかつた。

けれども、此處乞食を去らせるのは、如何にも残念で耐らない。又ヨ、と泣く可愛い乳呑兒の聲を聞くと、愈々膈をば千切られるやうだ。

ア、如何なる人の成れの果てあらう、不幸な親子もあればあるものであると、直ちに奥へ駆込んで見ると、丁度其處には、今脱いだばかりの、姉さんの餘所行に着て出る、立派な美しい晴衣があつた。

板垣退助と女乞食

伯は何の分別もなく、忽ちそれを持つて駆け出して行つた。そして乞食に與へやうとした。

處が乞食は受取らない。

「そんな結構な物をお坊ちゃんに頂きましては、と躊躇して居る。何處までも慎ましかかな女である。

伯は猶やり度くなつた。

「何有、そんな事は心配しなくても可いから、お持ちよ、お持ちよ、ねえ、上げるから……。そして此の衣服を早く着て、早く寒さを凌いだ方がいよ。此の寒さつたら耐りやしない。風邪を引くよ、病氣になるよ。」

女は漸々顔を俯向けて泣き出した。

すると此事が姉さんに知れたと見えて、奥では姉さんの伯を呼ぶ聲がした。

猪之助(伯の幼名である)は飛んで行くと、サア大變!

「まア随分だわね」とばかりて、姉さんは頻りと怨み出した。すると伯は、姉さんに向つて憊う言つた。

「なアんだ、あんな衣服の一枚や二枚、そんなに惜がらなくても好いてはありませんか。乞食が餘り寒がつて居たからくれてやつたのだ。姉さんはあれが無くても外に好いのを澤山お持ちせう、別に困りもしないんでせう、あの乞食は、姉さんの衣服のお蔭で、どんなに助かるか知れませんよ。」

伯の母は此事を蔭で聞いて仲裁に出て來たが、伯の行爲を大いに賞めて、姉さんをも宥め賺し、そして、此の女乞食には、それを持つて行つても差支ないと口添をした。

此の美しい女乞食は、幾度もく、猪之助の方を振返つては伏拜んだ。

美しい姉さんの衣服は、よく彼女の身に適つた。それは「狂亂」のお夏のやうな女であつた。

二

茲て一寸、伯の母堂の爲人を云つて置かねばならぬ。

伯の母堂は天成の賢婦人で、賦性頗る勇敢の上に、博仁慈愛の心に富んで居た。

就中伯が爲めに、種々の教訓をされた事は、一通りのものではなかつた。と云つて決して嚴格な譯ではなかつた。此處が考へ物である。

勿論伯は一人息子の事ではあり、又伯の家は立派な家柄であつた。采地は僅か三百石しかなかつたけれど、祖先は遠く武田信玄の驍將、板垣駿河守信形より出て居る。

それ故、母堂の教訓の方針としては、常に幼い者に卑しい心を起させてはならぬと云ふ事が主であつた。て、若し伯が菓子でも欲しがるやうな場合には、屹度望むよりその多くを與へられた。であるから伯も他人の物なんぞを羨望するやうな卑しい心を起さず、自分が何か貰ふと直ぐにそれを朋友に分けてやり、曾て意に介しなかつた。

又、母堂は、伯が行爲に就ても少からず苦心をした。先づ下らぬ干渉をしなかつた。又何事も自由にさせてあつた。されば伯が遊びに出掛けて、夜遅くなつて歸るやうな事があつても、又は少しぐらゐ危険な遊戯をしやうとも、そのやうな事では叱らなかつた。が、若し他の子供達と喧嘩などをして、泣いても家へ歸るやうな事があると、その時は優しく叱つた。

「家へ泣いて歸るやうでは、何うして偉い人になれるもんですか。」

それ故伯も、いつの間にか、早くも母の進取の氣性を受繼いで、人を憐む心が深く、自負心が強くなつた。又自由を貴ぶやうになつた。

それには此處に好い一例がある。面白いから附記して置く。

丁度伯が四つ五つの頃の事であつた。或日家僕や乳母に連れられて、相撲を見に行つた。處が其日は非常の大入で、場内立錐の餘地なしと云ふ有様。それ故伯の一行には何處からも見られない。尤も土佐の風習として、當時は、少々資産のある者は其多くは自分で棧敷を造り、そして見物するのであつた。されば、伯の腕白も、小兒ながら銘々自家の棧敷で、面白さうに見物して居るのを癢に觸て、「人はみんな棧敷で見居るのに、俺の棧敷がないのはどういふ譯だい」と拗ね出し、「おれは棧敷

でなければ見ない」と云つて、何うしても聞き入れない。到頭家へ歸つて了つた。

因て家僕や乳母は大いに持て餘し、仕方がないから伯の後へ附いて歸り、其の事を母堂に語つた。すると母堂は黙つて聞いて居たが、「成程男兒の氣象は然うなくてはならぬ、幼ない兒童の精神を挫いて了つてはもうそれ限です、あれのいふ通りに仕ておやんなさい」と言はれたから、早速棧敷を建てる事にした。が母堂は自から家人を指揮して、忽ち何十人の人足を集めさせ、ドシ／＼と命令して、一夜の内に建てさせて了つた。處て此棧敷は却々堅固に出来たもので、普通ならば一週間は優に掛る構造だつたさうである。

其翌日、此の小さな悪戯者であつた伯は、意氣揚々として此棧敷で、恰て大人のやうな顔をして見物して居たさうである。今の兩國々技館の、伯と照し合して考へて見ると面白い。けれども恐らく其の胸中には、彼の母の深切が、終生忘るゝ事が

出來ないであらう。

彼の母は同藩の中老、林勝重といふものゝ娘であつた。晩年までよく狂氣の夫を看護し、且つ子弟の薫育に盡されて居た。

星亨とお雛様

寢臺の上でも見惚れて恍惚

受出したはたつた十二兩の金

明治の奇傑とまで世に唄はれた星亨も、其の出處を尋ねて見れば、一向満らぬ者の悴であつた。

彼の親父は泰順と云つて、越後生れの漢法醫者で、國を出てから相州の浦賀に住み、家業の藪醫を渡世として居たが、此處でも一向患者は來ず、門前雀羅を張る始末に、又横濱の開港後、此處へ來て開業はしたものの、此處でも一向振はなかつた

星亨とお雛様

ので、更に浦賀に歸る事にしたが、困つたのは亨の始末であつた。

自分はまだ老耄れて了つて居るが、切めて此の小僧だけでも一人前の者にしてやり度いと思つて、考へたのは同じ町醫ではあるが、此の方は學問も新らしいし、人氣もある渡邊顯哉と云ふ醫者であつた。

親父も兼て見知越である處から、悴の手を曳いて、その玄關を訪れた。と、顯哉は直ぐに對面した。

「實は、」と親父は手をもじくしながら、「拙者もはや寄る年波故、いつ何時どういふ事にならうも知れぬ。それに何しろ君方の蘭學の醫者とは異つて、漢法ではもう時代遅れぢやに依つて、業を止めて浦賀へ引込まうかと思ふ。處て此の小悴ぢやが、此奴にだけは親の情で、何とか十分の學問もさせ度いと思ふが、何うぢやらうか、面倒ぢやが、君の處で面倒を見て下さるまいか。」

と云はれて顯哉は心地よく引受けた。

「ようこそ、然う云ふ事なら置いて入らつしやい。何有、漢法が何うの蘭法が何うのと云つた處で、別に變りはないのぢやが、是も時勢の然らしむる處とやらで仕方がないのさ。まア〜然う落膽せずと、悴の出世を樂みに、老後の保養でもなすつたが宜からう。」

と、慰めて親父は歸したが、悴は其儘預る事にして、更めて其の顔を見ると、イヤ陸でもない面色をして、苦虫を嚙潰したやうに控へて居る。

けれども、マア可い、何處か見處のある小僧だと思つたので、兎に角家へ置いとく事にした。而して、毎日藥の調合をさせると、武骨な手際で、不似合な、小さな衡を扱つては、何オンスの、何グラムのと、それでも几張面に藥劑の調合をしをる。かと思ふと又、業務の隙々には、

「オイ、亭、一寸來い、」などと呼んで、蘭學を教へたが、是又進歩の速いには、有紫の顯哉も舌を巻いた。

そればかりではない。星はちよくく薬局を留守にしては、何處へか散歩にでも行くやうな振をしては、無断で外國人の處へ英語を習ひに行きをつた。けれども顯哉は知らん顔をして居た。

が、其後何うした機會かに、顯哉はその外國人に逢つて聞くと、彼も亦星の熱心なのと、進歩の速いには驚嘆して居たと云ふ。

その内、世は御維新となつて、間もなく彼の開成所(大學の卵)が出来、大阪にもその分校が設けられた。

すると星は學問も餘程進んで居たので、何しろ英學者の少かつた時代だから、多少の教授ぐらゐは出来る資格があつたので、顯哉が周旋して其處の教官として大阪

にやる事にした。と、星は又此校でも教官の一人として教授しつゝ、自分も練習を怠らなかつた。

間もなく明治も二年となり、彼の脱藩者を復籍せしむる令が發布されたので、時の秀才陸奥宗光も和歌山に歸つて行つた。其時陸奥は同縣の榎参事、鹽路喜悅と力を協せて同市に英語學校を開設したが、星は校長に聘せられて行つた。是がそもく陸奥と星との關係の出来る最初であつて、又彼の出世の端緒であつた。

星は抑もの初對面の時、陸奥を見上げて妙に顔の長い目の窪んだ凄い男だと思ひ、陸奥は又星を見下して、何だか下品な猫さうな男だと思つて居たが、何方も見所があつたかして、星は陸奥の奥底の知れない、キリ／＼とした、自分の胸中を見透すやうな目で見たのが、怖いながらもスツカリ氣に入つて了ひ、又陸奥も彼の猫さうな下品な否、力ある處が氣に入つて了つた。

て、それから間もなく、陸奥は鹽路と相談して、星を和歌山藩の士族に推舉した。當時の習慣で平民が士族に教へると云ふ法はないと云ふ處から來たのである。星は何の満らないと思つたが、陸奥が怖さに大人しく頂戴した。處が茲に可笑しかつたのは、其後、明治十四年の頃に、星は北越地方へ遊説に行つて、例の「政府の馬鹿者共が」だとか、「壓制者流が」とか怒鳴つた罰として、士族の稱號を褫奪されて了つた事である。

二

閑話休題、明治も四年になると、陸奥は召されて朝廷に登り、間もなく神奈川縣令を拜命した。と、陸奥は星を和歌山から呼寄せて、横濱修文館の館長とした。その頃の事である。

星が書生時代、殊には後宮時代の遊邊は、誠に甚いものであつたが、或時妓樓に積り積つた遊蕩費の支拂残りが八十圓許りになつた。けれども幾度妓樓から催促を受けても、知らん顔をして居るので、到頭友人が仕方がないから拂つてやつた。又或時は、何樓で飲んで來たか、非常に酔ばらつて、往來を歩きながら、小便をして居ると、ふと見付けたのが例の選卒で、

「コレ／＼そんな處へ小便をしちや可かん！」

星は慌て、逃げ出したが、何うも不都合な奴だと云ふので、選卒は執念く星を追駈けて來た。と、星は立停つた。

「何故、貴様はッ？」とばかりで選卒は胸倉を取る。取られて星は濟まぬなど、云つて、お詫をする様な男でない。

「ソレ！」と連の書生に號令すると同時に、その選卒を引摺つて行つて、河の中へ

投げ込まうとした。

處が、どう致しまして、邏卒は大の強力者と來てるので、大盤石の如く動かない。ばかりか、やゝ暫く二人を相手に、上になり下になり取組合つて居たが、今度は反對に此方が投げ込まれさうになつたので、星は書生と共にスタコラ逃出して了つた。彼が二十二歳の時であつた。

然う云ふ風であるから、星は遊びに行つても、極く女には淡泊した方であつた。處が茲に唯一つ、彼の生涯を飾る可き、極く珍しい情話がある。

彼が横濱の修文館長となつた、その翌年の春頃の事である。彼は夜櫻を見物に行かうとばかりで、或晩二三人の書生を連れて、遊廓へ呑みに行つた歸り掛け、ブラ／＼馬車道通りの夜見世を素見しながら歸つて來た。

と、唯有る古道具屋の店頭に陳列してあつたのは、美事な大きなお雛様であつた。

星は不圖醉眼にそれを見咎めて、停徊去るに忍び難いと云ふ風であつた。が、忽ちつか／＼と其前へ行つて、

「オイ、是は幾らだ？」と尋ねた。

星は粗末な風をして居た。商人は其風體を見て、ナニ此の書生めがとても思つたか、「若しお買ひ下さるなら二十圓にお負けしませう、節句前だから本當は二十五圓頂き度いんですが、貴方が御買ひ下さるんなら……」

と少し輕蔑氣味に言つた。と星も勃然とした様子であつたが、「ナニ這麼物、十圓か十二圓ならいつでも買つてやらう、と言捨てゝそのまゝ行過ぎやうとした。

商人は生意氣な事を言ふ書生だ、一番困らしてやれとでも云ふやうな顔色をして、飽く迄見賤つて、星を呼返した。

「え、宜しうございます、口明けの事ですから一番景氣好く奮發して十二圓にお負
け申しませう、」と言つた。

星は、「よし」と云ふかと思ふと、懷中から新規の太政官紙幣を十二枚出して代を
拂ふと、商人は、遽かに追従輕薄世辭タラ／＼と品物を賞めそやすのを、星は嘲笑
ひしながらその雛箱を書生に持たせて歸つて行つた。

が、別に飾る場所もないので、自分の卓上に陳列べて見ながら、椅子に懸けて、
右顧左盼、

「何うだい、佳い容色ぢやないか、眞金町なんぞには、恁麼のは一人も居ないね。」
と言つたが、其の心地は書生達には分らなかつた。

彼は又、寢臺へ入つて後も、卓子の上のお雛様に見惚れて居たが、片附けもせず
其儘睡つて了つた……

千歳米坡と光明寺三郎

附り後藤猛太郎

父は俠客娘は藝者

其終がヱヱ

米坡の親父は千歳與五郎と云つて有名な俠客である。よく當時の食詰者が、彌よ
仕方が無くなると、彼の處の前へ行つて、仰反つて寢て居たものださうである。然
らすると助けてくれる。けれども茲に條件がある。千歳の若い者がいつも行倒れが
あるなど見ると、直ぐに飛出して行つて其の下の帯を見る。此奴が穢いと來ると、
直ぐ心懸の悪い奴だと云つて刎ね退けたものだ。けれども切立てのを締めて居ると

千歳米坡と光明寺三郎

直ぐ快く通してくれる。だから此の呼吸を知つた奴は、彌よ仕方がなくなると、衣服は質に入れても禪の眞白なのを締めて、彼の處へ行つて助けて貰つたとある。其娘の米八だから賣れたにも賣れた。霞町で米八と云へば一時は米八の霞町か霞町の米八かとさへ言はれたくらゐ。

處が、此の米八の米八が、光明寺三郎の女房に爲つた發端の話が可笑しい。

一體此の光明寺三郎と云ふ男は、仇名を「ザヨセヒン」と云つたくらゐ、當時佛蘭西歸りのチャキ／＼だつたが、男も好し、一時浪人で根岸邊に人の家の二階借をして居た時などは、部屋代がたつた一圓五十錢と云ふ、貧乏暮しだと云ふにも係らず、靴足袋は七圓五十錢と云ふ、巴里新流行の舶來品を穿いて居た。

又、彼の漢文は、餘程自慢だつたが巧くもあつた。彼が平生最負にして居た、役者の中村鶴藏が亡くなつた時にも、その傳を書いた事があつたが、誰しも感心しな

いものはなかつた。と云ふ變り者である。

或時、光妙寺が浪人で、一文もない癖に、燕枝と今輔を取巻に件れて、中洲の枕流館へ行つて團十郎を招いた時の事である。

藝者は誰を掛けやうかと云ふ話になると、霞町から米八を呼んで、あの金の蛇の腕輪と、八分玉の珊瑚珠の簪とを、捲上げて遊んで遣らうといふ事になつた。米八は當時のハイカラで、馬鹿にそんな物をよく身に着けて居た。

因て光妙寺は俄に華族の大金持と成り濟し、皆なはそのお供の格で、成田屋までが舞臺の腕を振つて座敷を取廻はした處から、米八はスツカリ瞞されて了ひ、二三百圓も自腹を切つた後で、始めて素寒貧の光妙寺と云ふ事が分り、腕輪も簪も望みの如く藏へ通ふといふ始末に、何が何でも良人光妙寺を世に出さなくてはならぬと云つて、米八は山田司法大臣に運動した。

其の御蔭で光妙寺は大審院検事となり、又代議士となり、

「決闘は文明の花なり、」など、演説する。東洋のクレマンソーを氣取つて議會を騒がす。借金をする。死ぬる。と云ふ騒動が持上つた。……

けれども米八はそれにも怯げず、再び葭町へ現はれた時にも、異様の姿で座敷へ出るので、みんなが、

「何だいその風は、宛て鬼神のお松か姉妃のお百見たいぢやないか、」と冷かすと、米八は怒つたが、

「それなら誰と云へば宜いのさ、」と問へば、

「デヨセヒンさ、」と光妙寺の惚言を言つて居た。

又、光妙寺が死んだ時には、執達吏に押へられずに居た物は、後藤伯から貰つた鸚鵡だけであつたが、鸚鵡も主人が亡くなつたことを知らずに、米八の口調を

真似て、

「旦那〜〜」

と呼んで居たと云ふ。一寸哀れな話である。

二

其彼、米坡は、一時一寸、後藤猛太郎の世話になつて居たが、猛太郎と關係を絶つた時の事である。

其前に少し許り、米坡が立換へた金があるので、猛太郎は手切金の代りに二萬圓の借用證書を米坡に遣つた。

米坡は證書は貰つたものゝ、猛太郎にはとても二萬圓の金はないし、

「此奴親類の岩崎彌之助から取つてやらう、」と考へて、之を磯部四郎に見せて鑑定

をして賣ふと、磯部も確かに取れると受合つた。

米坡は「めたといふもので、指輪を質に置いて金を作らへ、十七圓計りの土産物を持つて岩崎の處へ出掛けた。

まづ彌之助に遇つて二萬圓の證書を取出すと、彌之助は、

「あんまり高い、三千圓に負けとけ」と言ふ。

米坡の方ではどうせ元は唯同然の代物だから、三千圓でも結構と思つて、直ぐ、

「宜しうございます」と負けた。

すると彌之助は夫人を呼んで、

「三千圓出して此女に遣れ」と云ふから、夫人は、

「何の金ですか」と聞くと、「猛の關係だ。」

といはれて夫人は今日まで色々の事度々岩崎へ迷惑を掛けて居るのに、又こん

な事があつては餘り氣の毒だと思ふと、ズーンと持病の癩が起つて、其儘其處へ引繰り返つて了つた。

米坡は自分が来た爲に、奥様が病氣を起しては、居ても立つても居られない。直ぐ駈寄つて介抱する。

醫者が来る。

家内大騒ぎとなつた。

恚う云ふ場合になつて見ると、有紫の米坡も最う催促は出来ない。「エ、ままよ、又來やう、」

ところへ歸つたのは可いが、ドサクサ紛れに二萬圓の證書は、其場へ置きつばなしに忘れて歸つたものだから、終になつて催促には行かれず、折角指環を質に置いて作らへた十七圓の土産も何も無いになつた。

千崎米坡と光明寺三郎

と、是だけ聞くと、米坡も頗る可愛い、妓だが、後になる程可けなくなつて来る。彼女、其後、女俳優となつて、南臺北蝦を彷徨ひ歩き、北海道の札幌で、藝者をして居た事もあるが、今は何國の果に居て、何をして居る事やら。と思つて居ると、つひ此間は神田の立花亭へ、縦看板が出て居て「歌舞音曲千歳米坡」とある。

山本權兵衛とおとさきさん

まだ肩揚も取れぬ處女
猛然として出掛けたは著屋

—

學生時代は飲む遊ぶ、それはく手も附けられない亂暴男、海軍兵學校を三度迄退校處分を受けたのを見ても、如何に當時の無茶であつたかが察しられる。彼が兵學校を出て彌よ見習士官になつた當時の事である。當時南品川の三丁目に海軍士官の合宿所があつて、彼も其處に起臥して居た。處が其の合宿所の向ひの家が、丁度著屋と云ふ青樓であつた。が、場所が場所だ

山本權兵衛とおとさきさん

けに、同僚は皆、夜になると素見に行つて了ふ。

此日も一同が皆出て行つて了つた後であつた。彼は一人てボンヤリ二階に残つて居た。

と、向うの箸屋の二階に、今しも可憐な一人の娘が、袖を顔に押當て、シクシクと泣いて居る。

齡の頃は十六か七か、まだ肩揚も取れぬ堅氣な處女である。

彼の二階からは手に取る如く、淺ましい青樓の二階の光景が見える。

外の妓達は皆大肌脱になつて、鏡に向つて、化粧をして居る。

旋てそれが濟んで了ふと、皆バツリと草履を穿いて、皆店へ出て行つて了ふ。

と、娘は耐へ兼ねたやうに、欄干に凭れて、ヒイと泣入つた。

權兵衛は熱としてゐられなくなつた。

將にその光景が、女郎を嫌つての上には相違ない。

彼は桂の専横を、見るに見兼ねたやうに直ぐに飛んでつた。

二

「へい入らつしやいまし。」

箸屋の妓夫太郎は驚いた。

外の士官さん達はよくおいてなさるが、いつにも苦蟲を嚙潰したやうな顔をして、

ジロリと此方を見たり、いつにも来た事もない不愛想な士官さんが、突然に

玄關へやつて来たので、是は希らしいと草履を直した。

權兵衛はそれを突掛けると、丁々と二階へ上つて行つた。

道手婆がそれへ出て、

山本權兵衛とおとせさん

「お見立は？」

「先刻二階で泣いて居たのを出してくれ、」

「二階で泣いて居た？」

遣手婆は其儘引下つて行つた。が、旋て帳場へ行くと、

「何うしたんでせう、今のお客ア可笑な事を言つてるよ、先刻二階で泣いてた妓を出してくれなんて、誰でせう一體？」

番頭もアハ、笑ひ出して、

「今時そんな古風な事を言つたつて分らないが……ア、あれだらう、お登喜さんだらう、」

「なアる程、」

と遣手も手を拍つて、

「うまい物を見立てたねえ……。」

「何しろ變り物の士官だからな、と番頭は笑つたが、

「だがありやア可いねえや、まだ鑑札が下りて居ないんだから、」

「ぢやア然う言つて斷らうかね、」

「然うしておくれ。」

て又遣手は引返して行くと、

「折角でございますが、あの妓はお生憎様でございます。」

「生憎と云ふと？」

「まだ鑑札が下りて居ないんでございますから、」

「鑑札と云ふと？」

よく色んな事を聞く人だと思つたが、

「つまり警察の方からまだお許しが出て居ないんでございますから、商賣をさせる事は出来ないんでございます。」

「それでも好いからあの妓を出してくれ、」

「まだ鑑札が下りて居ないんですから、」

「エ、喧しい！」

と権兵衛は叱り飛ばした。

婆は慌て、引下つて行く。今度は若い衆が代つて出て来て、

「主人に相談致しますと、何うせ三四日の内には店へ出すのだから、本人さへ納得したら、一層お敵娼に出したら可からう……と焦う申しますので、へい、何うか一寸お待を、」

権兵衛はニヤリと笑つた。

旋て、賣物には花を飾れだから、内證でも急にお登喜を呼んで、お化粧をさせる、衣服を着せ更へさせる。頼と婿さんでも来たやうな騒ぎ。

けれどもお登喜さんには何が何だか分らない。

支度が出来ると権兵衛さんの座敷へ連れて出る。

旋ておシケになる。

権兵衛さんは其まで一言も發せず、たゞ黙つてまじくと娘の様子を見て居たのであるが、人々が居なくなると、

「何故泣いて居たの？」

「……………」

「女郎になるのが厭だから泣いて居たんぢやらう、然うぢやらう、」

「は、はい……、」と又泣出してしまふ。

「一體、何うして斯う云ふ處へ來たのか、」

「家が困つて居りましたので、私からお願ひしまして、參つたのでございますけれど、彌よ近い内には店へ出なければならぬのかと思ひますと、夫が悲しくなりまして……、」

權兵衛も泣き度さうな顔をして、

「家は何處か？ 又親父は何といふか？」

「越後國中蒲原郡菱瀉村の漁師伊澤鹿助と申す者の娘登喜と申します。」

「何しろお前は健氣の者ぢや、何とかして救つて遣り度いと思ふが、金は幾ら借りてるのぢや？」

「四十圓……」

「四十圓？」

權兵衛は眉を顰めた。

「たつたそればかりか。それで女の生涯を犠牲にするのぢやな。と云つたつて今俺にはないが……。よし何とかして遣らう……。」

其日は其儘歸つて行つた。

が、翌日になると又ツラリとやつて來た。而して、女に耳打して、又狐鼠々と歸つて行つて了つた。

箸屋では、餘程あの女が、お氣に入つたものと噂して居た。

舞臺廻つて箸屋の裏口となる。

其夜は折から雨降つて、夜商人の聲も聞えず、何處か吠ゆる犬の聲が、唯遠くの

山本權兵衛とおときさん

方で聞ゆるばかりだ。

時も二時。箸屋の裏口では眞黒な外套を冠つた黒洋服の男が、三四人ウロウロして居る。けれども誰も誰も氣が着かない。

折しも高い二階の雨戸を開けて、パツと射したる灯火に、錦繪からでも抜け出たやうに艶やかに顔を出したのは、島田に結つたお登喜さんであつた。

下からはその黒洋服が、何やら手眞似て合圖をする。と同時に他の黒洋服が、パツと毛布の、幾枚か重ねた四隅を持つて待受ける。

女は欄干へシツカリと、縮緬の扱帯を結んで、下げて、それに攜つて、スルくと下りた。と見る間に毛布へ轉がり込んだ。……

と、下に待受けた一同は、そのまゝスツポリ毛布に包んで、何處ともなく擔いで逃げ去つて了つた。

夜が明けて見ると箸屋では大變である。ソレ妓が逃げた、お登喜が居なくなつたと云ふので、上を下への騒動。

権兵衛さんは獨りて合宿所の二階から見居て可笑しがつて居たが……。箸屋では旋て様子で感付いて、直ぐに合宿所へ談判に來た。

けれども、権兵衛は議會へ臨んだ時のやうに、知らぬ存ぜぬの一轉張で、箸屋の主人を手古摺らせた。

が、金はその儘でも置けぬので、旋て月賦で綺麗に拂つてやる事にした。そして娘は弟の太田の下宿へ隠して置いた。

是が後の總理大臣山本權兵衛伯の夫人である。との事である。

加藤高明と養家の養女

からかはれてア〜怒り
うつけにしたも功名心から

—

高明は元尾州名古屋の藩士、祖父を作助、父を重文といひ、彼はその次男で、萬延元年正月、父が佐屋といふ處の代官詰を勤めて居る頃、その地で生れた兒だ。同腕は四人あつた。

一體彼が家は至つて身分の低い家柄で、御徒士であつた。而して、生家の姓は服部と云ひ、彼は幼名を總吉と云つて居た。

處へ彼が生れると間もなく、父は家族を引連れて、名古屋の城下なる日置小川町に移り、後又天道町へ引越した。

丁度總吉が六つ七つの時であつた。彼は同藩の加藤勘十郎といふ人の處へ、養子にやられる事になつた。

此人は伏見町に住んで居た。が、家格は生家よりも少々好い方であつた。兎も角も家格の好い處へ行つて居れば、後には屹度爲になる事があるに相違ないからと云つて勧められたのである。

けれども總吉は厭がつた。自家には多勢遊び友達（兄に元助、弟に成堅、其又下に丈之助と云ふ、何れも悪戯盛りのが居た）もあるし、何うも行く氣がしなかつた。て、駄々を捏ねたので、漸と兩親に説得されて行つた。

處が此の加藤家と云ふのは、家柄こそ生れよりも上であつたが、家政は生家よりも一層困難であつた。そればかりではない。

此の勘十郎の妻といふものは、山本某なる者の家から嫁に来て居たものであるが、丁度總吉が十か十一の頃、良人が死んだので里方へ歸つて了つた。(つまり總吉は可愛がられた養母に置き去りにされて了つたのである)

尤もこれに就いては勘十郎の母に當る人が、(つまり姑が)非常に喧しい女であつた故、到頭堪へ兼ねて實家へ歸つたのであると云ふ説もある。

て、後には養祖母と總吉ばかりが残つた。

而して、此時から後、老母と總吉の世話を誰がしてくれたかといふのに。一體、

老母といふ人は、勘十郎の父へ嫁に来る前、一度他へ縁付いた事のある女である。て、其家へ可愛い娘まで出来たのが、故あつて離縁となり、後娘を置いて加藤家へ嫁に来たのである。

それ故、生木を割かれるやうな悲劇に、娘は母親に會ふ事もならず、常に涙に袖を絞つて居つたのだが、母親が再縁先の、勘十郎は死に、嫁は里方へ歸つた上は、誰に氣兼ねも要らないので、一層の事、生の母の處へ行つて、老先短い老母の世話をしやうと、喜び勇んで加藤家へと、乗込んで来たのである。

處で、總吉は、幼心でも、可愛がつてくれた養父は死に、又養母は母方へ歸つて悲しい處へ、知らない婦人が来て家の切盛をするやうになつたので、俄に家庭が面白くなくなり、よく、ヒヨイと實家へ歸つては、兄や弟達と面白可笑しく遊んで居た。そして養家へ歸ることが厭でく耐らず、十日も二十日も實家に居ては、いつ

も終には泣顔しいく、母親に賺されては、厭々ながら養家へ送り歸されて居た。處が、或日の事、此日も實家へ遊びに行き、追歸されて養家へ戻つて見ると、丁度八つ九つばかりになる、可愛らしい女の兒が来て家で遊んで居る。因て總吉は、初めの中は、何處かの親類からでもお客に来て居るのであらうらゐに思つて居たが、いつまで経つても歸る様子が見えない。そればかりではない。後には自分も遊び友達になつてしまつた。……

三

其後、間もなく、總吉は、藩覺の明倫堂へ入り、漢學の素讀を受けたが、又、英佛人を雇うた洋學校が出来たので、總吉は更に其處へ入學して、十三の時迄修學に餘念なかつた。

處が例の娘の一件である。此娘が總吉の處へ来てから後といふものは、總吉が明倫堂へ通學する途中なんぞで、ヒタと友達に出會すと、友達はふと立寄り、「お前の家には嫁さんが来たな、」などと云つてよく冷評した。が、其都度彼はアン〜と怒つた。此處等は宛て議會式であつた。

けれども、其後、丁度十四の春を迎へた時に、總吉は愈々國を出て、東京へ遊學をされるといふお別れの朝、

「兄さん、御機嫌宜しう、」

と、彼が前に手を支いて、優しくも挨拶した彼女が——その愛くるしい目に無限の情を籠めて、彼を見送つた時の顔——及其その舉動は、確に未來の夫に別れる時の様子であつた。

又、彼も、功成り、錦を着て歸る其時には、正しく自分の妻たるべきものは、此少女より外にないものだと思つて居たのである。

四

愆て彼は、明治六年、十四歳の時神田の共立學舎へ入り、次で外國語學校へ轉じ、同八年、十六歳の時、開成所へ入つたが、是が後に大學と改稱したものである。而して、此處で、彼は明治八年から九年、十年と二ヶ年間豫科に居り、それから法學部へ入つて、十四年の七月に卒業した。

彼が國に居つた時に、加藤家の養女となつた彼の娘は、實に彼が嫁にしやうが爲めの女であつた。

て、彼も、最初の中は、筒井筒振分髪の昔よりといふやうな譯で、滿更厭でもな

かつたものと見え、彼が大學に在校の當時、養女と結婚をする約束は結ばれたのである。

されば國に居る養女お何さんは、一日も早く彼が錦衣歸郷の日をば指折り數へて待暮して居た。

其頃彼女は丁度妙齡であつた。

けれども功名心勃勃たる彼は、まだ歸つて家庭を作らうとは思はなかつた。

五

彼が大學を卒業したのは、前にも云つた通り明治十四年の七月であつた。當時大學を優等の成績で卒業したものは、皆官費で洋行をさせる事になつて居た。處がその規約は丁度彼が卒業の前年(十三年)限りで、沙汰止になつて了つて居た。つまり彼